

鹿児島県奄美市

# 史跡小湊フワガネク遺跡

保存活用計画書

二〇二〇年

奄美市教育委員会

奄美市文化財叢書九

# 史跡小湊フワガネク遺跡 保存活用計画書

2020

奄美市教育委員会



## 史跡小湊フワガネク遺跡全景



(城 康弘氏撮影)

### 南西諸島を代表する古墳時代並行期の貝製品生産遺跡

— 亜熱帯の自然の恩恵を受けた美しい貝製品生産の歴史を体感し、伝えていくまち小湊 —

## 史跡小湊フワガネク遺跡出土夜光貝匙



(奄美市教育委員会撮影)

南西諸島を代表する古墳時代並行期の貝製品生産遺跡

—亜熱帯の自然の恩恵を受けた美しい貝製品生産の歴史を体感し、伝えていくまち小湊—

# 序 文

小湊集落は、喜界島を臨む東海岸に面し、海岸沿いに発達した砂丘地に営まれています。その砂丘地の北側には、シマウタに「ソテツぬキョラさや古見金久」と唄われているように、ソテツの植栽が美しい畑地が広がっています。この畑地の地下から、小湊フワガネク遺跡が発見されたのは、平成8年度のことでした。

遺跡からは、6～7世紀頃を中心に、夜光貝匙をはじめとする貝製品が豊富に出土して、加工途上のものも多数含まれていたことから、貝製品を集中的に製作していた生産拠点であることが明らかになりました。当時の奄美大島の様子を知ることができる貴重な遺跡として、小湊フワガネク遺跡は平成22年8月に国の史跡に指定されました。また、その出土品も学術的に重要であるとして、平成28年8月には、出土品1,898点が、国の重要文化財に指定されました。

奄美市教育委員会では、小湊フワガネク遺跡を未来に継承し、その学術的価値を普及させ、活用していくために、地元住民や学識経験者等による「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会」を設置し、平成30年度、令和元年度の2年間、史跡の保存活用計画の策定に取り組んでまいりました。

この計画策定を受けて、史跡が地域の誇りとなるように、そして史跡を訪れたみなさんに感動していただけるように、社会教育や学校教育における活用をさらに進めてまいります。さらに、集落のにぎわいを生み出す地域資源として、史跡が地域と人の交流の場となりますよう、みなさまのご協力をいただきながら取り組んでまいります。

最後になりましたが、今回の保存活用計画の策定にあたり、ご指導賜りました「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会」委員の皆様方に御礼申し上げます。特に本書刊行まで重ねてご来島いただき、ご指導を賜りました池田榮史先生・赤司善彦先生・木方十根先生・羽田麻美先生の専門委員の先生方、文化庁文化財第二課、鹿児島県教育庁文化財課の先生方に厚く御礼申し上げます。

令和2年3月

奄美市教育委員会  
教育長 要田 憲雄

# 例 言

1. 『史跡小湊フワガネク遺跡保存活用計画書』は、鹿児島県奄美市名瀬大字小湊に所在する国指定史跡小湊フワガネク遺跡における史跡の恒久的な保存活用を持続的に維持するため、その具体的方法を示した計画書である。
2. 「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定事業」は、平成30年度・令和元年度に文化庁の史跡等保存活用計画等策定費国庫補助金を受けて、奄美市が実施したものである。
3. 「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定事業」の実施に際して、「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会」（委員長：琉球大学国際地域創造学部教授・池田榮史氏）を設置して、奄美市教育委員会文化財課が事務局を務めた。
4. 「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会」の運営、協議並びに本書の作成に際しては、文化庁文化財第二課及び鹿児島県教育庁文化財課の指導・助言をいただいた。
5. 本書は、「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会」の会議をふまえて、事務局がとりまとめたものである。その執筆・編集は、高梨 修（博物館長兼課長補佐兼係長）が中心に行い、喜友名正弥（主事）、平城達哉（主事）が補佐した。各章の執筆分担については、下記のとおりである。

第1章・第3章・第4章・第6章・第7章・第8章	～ 高梨 修
第2章第1節1・2(1)(5)・3・4・5, 第2節～第5節	～ 高梨 修
第2章第1節2(2)	～ 高梨 修・羽田 麻美
第2章第1節2(3)(4)	～ 平城 達哉・高梨 修
第6章	～ 喜友名正弥・高梨 修

6. 本書の作成に際して、次の機関・個人のご指導・ご協力をいただいた。ここに記して、御礼申し上げる。

小湊町内会・小湊婦人会・奄美看護福祉専門学校・奄美市立小湊小学校・奄美市立大川小中学校・奄美市立崎原小中学校・高 美喜男（奄美市文化財保護審議会委員）・西 真弘（奄美マンガースバスターズ）

7. なお、本計画は、令和2年（2020）年4月1日より発効し、今後の追加指定や史跡の活用・整備状況等を思量しながら、おおむね10年毎に見直しを行うものとする。

# 目 次

## 序 文

第1章 保存活用計画策定の目的	1
第1節 保存活用計画策定の経緯・目的	1
第2節 保存活用計画策定委員会の設置	1
1 委員会の設置	
2 委員会の組織	
3 委員会の経過	
(1) 小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会	
(2) 地域懇談会・パブリックコメント	
(3) 自然環境調査・生業関係調査	
第3節 保存活用計画の位置づけ	5
第2章 史跡小湊フワガネク遺跡の基本情報	8
第1節 遺跡の周辺環境	8
1 地理的環境	
(1) 奄美市	
(2) 古見方地区	
(3) 小湊集落	
2 自然的環境	
(1) 気候	
(2) 地形・地質	
(3) 植生	
(4) 動物	
(5) ヤコウガイ（夜光貝）	
3 歴史的環境	
(1) 時代区分	
(2) 先史	
(3) 中世	
(4) 琉球国統治時代以降	
(5) 古地図にみる小湊	
4 文化・経済	
(1) 交通・交流	
(2) 生業活動	
(3) 伝統的行事	
(4) 観光	
5 文化財	
(1) 周辺文化財群	
(2) 伝統的農業景観	
第2節 文化財指定に至る経緯・経過	48
1 史跡	
2 重要文化財	
3 指定の状況	
(1) 史跡	
(2) 重要文化財	

第3節 小湊フワガネク遺跡の発掘調査	54
1 遺跡の立地	
2 発掘調査の経過と実施箇所	
(1) 確認調査	
(2) 緊急調査	
(3) 範囲確認調査	
3 遺跡の変遷	
4 古墳時代後期並行期の発掘調査成果	
(1) 遺構	
(2) 遺物	
(3) 自然遺物	
(4) 遺跡の特徴	
第4節 指定地の状況	70
1 史跡の指定範囲	
2 史跡の土地所有状況	
3 史跡の土地利用状況	
第3章 史跡の本質的価値	73
第1節 史跡の本質的価値	73
1 夜光貝匙等をはじめとする貝製品の集中的製作が行われた生産遺跡	
2 6～7世紀における生業や食料等の暮らしがわかる遺構・遺物に恵まれた遺跡	
3 6～7世紀の奄美社会を解明する遺跡	
4 南方物産のひとつとしてのヤコウガイ交易の様子をうかがわせる遺跡	
第2節 史跡の構成要素	74
第4章 史跡の保存活用をめぐる現状と課題	76
第1節 保存における現状と課題	76
1 保存の現状	
2 保存の課題	
第2節 活用における現状と課題	77
1 活用の現状	
2 活用の課題	
第3節 整備における現状と課題	81
1 整備の現状	
2 整備の課題	
第4節 運営体制における現状と課題	81
1 運営体制の現状	
2 運営体制の課題	
第5章 史跡の保存活用における基本方針	84
第1節 大綱	84
第2節 基本方針	84
第6章 史跡の保存	86
第1節 保存の方向性	86
第2節 保存の方法	87
1 保存計画区域の対象範囲	
2 地区区分	

3	各地区の現況	
4	日常管理	
5	現状変更等の取扱方針及び基準	
	(1) 現状変更等の取扱方針	
	(2) 現状変更の法的根拠	
	(3) 現状変更に伴う許可申請区分	
	(4) 現状変更の取扱基準	
<b>第3節</b>	<b>追加指定</b> .....	98
<b>第4節</b>	<b>公有化</b> .....	98
<b>第7章</b>	<b>史跡の活用</b> .....	<b>99</b>
<b>第1節</b>	<b>活用の方向性</b> .....	99
<b>第2節</b>	<b>活用の方法</b> .....	99
1	社会教育における活用	
	(1) 史跡の周遊見学順路の設定	
	(2) 史跡に対するガイドンス	
	(3) 講演会・講座・体験学習等の開催	
	(4) 史跡の周辺文化財群の一体的位置づけ	
	(5) 史跡の情報発信	
2	学校教育における活用	
	(1) 史跡を教材とした地域学習プログラムの開発・活用	
	(2) 史跡を教材とした歴史学習プログラムの開発・活用	
	(3) 体験学習の推進	
3	地域振興における活用	
	(1) 史跡を活かした小湊集落周遊ルート of 策定	
	(2) 史跡を活かしたイベント開催	
	(3) 小湊集落で行われている自然観察会との連動	
	(4) 史跡に関わる地域資源のブランディングと情報発信	
	(5) 史跡一帯の畑地における伝統的農業景観の保全と活用	
4	観光振興における活用	
<b>第8章</b>	<b>史跡の整備</b> .....	<b>111</b>
<b>第1節</b>	<b>整備の方向性</b> .....	111
<b>第2節</b>	<b>整備の方法</b> .....	111
1	保存のための整備	
	(1) 休耕地における繁茂樹木に対する対策	
	(2) 農道の整備による通行環境の向上	
	(3) 砂丘地形の保全	
2	活用のための整備	
	(1) 現地見学におけるガイドンス機能の充実	
	(2) 現地見学を円滑に進めるための公共施設の整備	
	(3) 史跡の価値を伝えるガイドンス施設の整備	
	(4) 史跡に至る誘導情報の充実	
<b>第3節</b>	<b>整備のための発掘調査</b> .....	112
<b>第9章</b>	<b>史跡の保存活用に係る運営体制</b> .....	<b>114</b>
<b>第1節</b>	<b>運営体制</b> .....	114
<b>第2節</b>	<b>経過観察</b> .....	115
1	経過観察の方法	

2 観察指標の設定

第10章 実施計画 117

第1節 短期計画（令和2～6年度） 117

- 1 保存
- 2 活用
- 3 整備

第2節 中期計画（令和7～11年度） 118

- 1 保存
- 2 活用
- 3 整備

第3節 長期計画（令和12～16年度） 120

- 1 保存
- 2 活用
- 3 整備

付 編

- 1 小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会設置要綱
- 2 パブリックコメント抄録

# 第1章 保存活用計画策定の目的

## 第1節 保存活用計画策定の経緯・目的

---

史跡小湊フワガネク遺跡は、鹿児島県奄美市名瀬大字小湊の海岸砂丘上に位置する古墳時代並行期（6～7世紀）の遺跡である。南西諸島特有の大型貝類を中心に貝製品の製作加工が行われた生産遺跡であり、南西諸島において稀有の遺跡である。

史跡指定地を含む一帯の畑地は、緩やかに休耕地が増加する状況にある。これらの畑地については、休耕地の増加に伴い、草木の繁茂による景観の荒廃も認められるようになり、史跡の恒久的保存管理を図る観点から影響も懸念されている。耕作者や地権者、さらには関係機関等において、現状変更等に対する基準の周知・共有等の必要が生じている。

また当該地域一帯の畑地には、土地境界にソテツが連続して植栽され、耕作地の区画を示すとともに、食糧難の時代には救荒食としてソテツの澱粉利用が図られ、耕作にもソテツの多角的利用が行われる等、奄美群島特有の伝統的農業景観が形成されている。当該景観についても、かねてから保全の必要性が指摘されていたが、平成29年度から「奄美市景観計画」の策定が進められていて、その計画とも整合的に保全を図る必要が生じている。

史跡に対する課題が浮かび上がる一方、啓発普及活動の進展に伴い、史跡に対する期待感も、小湊集落をはじめ、近隣の「奄美看護福祉専門学校」「奄美市立小湊小学校」「奄美市立大川小中学校」「奄美市立崎原小中学校」等でも高まり続け、史跡の活用・整備を要望、期待する声が多数寄せられている。そうした史跡をめぐる課題や期待感の高まりを受けて、奄美市教育委員会では、史跡を未来に向けて恒久的に保存し、適切な管理を行いながら次世代に継承し、その価値を伝えていくため、「史跡保存活用計画」について事業化し、奄美市の施策として計画を策定し、推進していくものである。

## 第2節 保存活用計画策定委員会の設置

---

### 1 委員会の設置

---

史跡小湊フワガネク遺跡の保存管理及び活用整備の基本方針となる保存活用計画について幅広く議論し、その計画を策定するため、「史跡小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会設置要綱」に基づき、平成31年2月7日に、以下に示す「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会」を設置した。

## 2 委員会の組織

「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会」は、学識経験者の専門委員，地元委員，奄美市役所庁内委員，事務局（奄美市教育委員会）で構成されている。

委員構成は、「専門委員」として学識経験者による奄美群島における学術的調査研究の実績を所有されている4人，「地元委員」として小湊町内会会長（集落区長），奄美看護福祉専門学校教頭，奄美市文化財保護審議会会長の3人，「庁内委員」として奄美市役所の商工観光部長，農林水産部長，建設部長の3人に出席していただき，合計10人から成る。

「指導機関」として，文化庁文化財第二課及び鹿児島県教育庁文化財課にも出席していただいた。

「事務局」は，奄美市教育委員会事務局である。本事業の担当課である文化財課が事務局を担当した。

### 平成30年度委員名簿

区分	氏名	所属・職名・専門分野		備考
専門委員	池田 榮史	琉球大学国際地域創造学部 教授	考古学	
	赤司 善彦	大野城心のふるさと館 館長	考古学	
	木方 十根	鹿児島大学大学院理工学研究科 教授	文化的景観	
	羽田 麻美	琉球大学国際地域創造学部 准教授	自然地理	
地元委員	東郷 武	小湊町内会 会長		
	木元浩一郎	奄美看護福祉専門学校 教頭		
	山下 茂一	奄美市文化財保護審議会 会長		
奄美市役所 庁内委員	武下 義広	奄美市商工観光部 部長		
	山下 仁司	奄美市農政部 部長		
	本山 末男	奄美市建設部 部長		
指導機関	浅野 啓介	文化庁文化財第二課 文化財調査官		
	森 幸一郎	鹿児島県教育庁文化財課埋蔵文化財係 文化財主事		
事務局 (奄美市 教育委員会)	要田 憲雄	奄美市教育委員会 教育長		
	山田 春輝	奄美市教育委員会 事務局長		
	久 伸博	奄美市教育委員会 文化財課長		
	高梨 修	奄美市教育委員会文化財課 博物館長兼課長補佐兼係長		事業担当
	山下 和	奄美市教育委員会文化財課 主事		
	平城 達哉	奄美市教育委員会文化財課 主事		
	喜友名正弥	奄美市教育委員会文化財課 主事		事業担当

### 平成31年度・令和元年度委員名簿

区分	氏名	所属・職名・専門分野		備考
専門委員	池田 榮史	琉球大学国際地域創造学部 教授	考古学	
	赤司 善彦	大野城心のふるさと館 館長	考古学	
	木方 十根	鹿児島大学大学院理工学研究科 教授	文化的景観	
	羽田 麻美	琉球大学国際地域創造学部 准教授	自然地理	

地元委員	東郷 武	小湊町内会 会長	
	馬籠 勝裕	奄美看護福祉専門学校 教頭	
	山下 茂一	奄美市文化財保護審議会 会長	
奄美市役所 庁内委員	武下 義広	奄美市商工観光部 部長	
	山下 仁司	奄美市農林水産部 部長	
	橋口 義仁	奄美市建設部 部長	
指導機関	浅野 啓介	文化庁文化財第二課 文化財調査官	
	森 幸一郎	鹿児島県教育庁文化財課埋蔵文化財係 文化財主事	
事務局 (奄美市 教育委員会)	要田 憲雄	奄美市教育委員会 教育長	
	福長 敏文	奄美市教育委員会 教育部長	
	久 伸博	奄美市教育委員会 文化財政策調整監兼文化財課長	
	高梨 修	奄美市教育委員会文化財課 博物館長兼課長補佐兼係長	事業担当
	山下 和	奄美市教育委員会文化財課 主事	
	平城 達哉	奄美市教育委員会文化財課 主事	
	喜友名正弥	奄美市教育委員会文化財課 主事	事業担当

### 3 委員会の経過

#### (1) 小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会

「小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会」による会議は、通算4回開催され、以下の事項について意見交換や議論を重ねた。



図1 保存活用計画策定委員会による現地視察



図2 第4回保存活用計画策定委員会の様子

	開催期日	協議事項	計画書該当部分
1	平成31年2月7日	自然環境調査（砂丘地形調査）報告 小湊フワガネク遺跡の現状把握について	第1章～第4章
2	令和元年7月30日	小湊フワガネク遺跡の本質的価値・保存管理について	第5章～第6章
3	令和元年10月30日	小湊フワガネク遺跡の活用整備及び計画案全般について	第7章～第10章
4	令和2年1月28日	自然環境調査（砂丘地形調査）報告 『小湊フワガネク遺跡保存活用計画書（案）』について	全章

表1 小湊フワガネク遺跡保存活用計画策定委員会の開催

## (2) 地域懇談会・パブリックコメント

また、この間に、史跡小湊フワガネク遺跡の保存管理及び活用整備の基本方針となる保存活用計画について、史跡が所在する小湊集落の地域住民、教育機関等と共有するため、地域懇談会を通算13回開催し、意見・課題・要望等をうかがうことができた。

あわせて、本史跡の保存活用計画について、市民から広く意見を聴取し、計画策定の参考とするため、令和元年12月28日から令和2年1月26日までパブリックコメントを実施し、令和2年1月24日には小湊町内会でパブリックコメント募集に伴う住民説明会も開催した。22人から7件の意見が寄せられた。

	開催期日	対象	概要	人数
1	令和元年8月20日	小湊町内会	小湊フワガネク遺跡の現状と課題等について、地元住民と意見交換を実施	25名
2	令和元年9月26日	小湊婦人会	小湊フワガネク遺跡の現状と課題等について、地元住民と意見交換を実施	8名
3	令和元年10月4日	小湊八月踊り保存会	小湊フワガネク遺跡の現状と課題等について、地元住民と意見交換を実施	20名
4	令和元年10月9日	奄美看護福祉専門学校	小湊フワガネク遺跡の現状と課題等について、教員・学校職員と意見交換を実施	3名
5	令和元年11月21日	奄美市立大川小中学校	小湊フワガネク遺跡の現状と課題、要望等について、教員と意見交換を実施	1名
6	令和元年11月21日	奄美市立崎原小中学校	小湊フワガネク遺跡の現状と課題、要望等について、教員と意見交換を実施	2名
7	令和元年11月22日	奄美看護福祉専門学校	小湊フワガネク遺跡に対する要望や期待等について、教員と意見交換等を実施	1名
8	令和元年11月22日	小湊町内会住民①	小湊フワガネク遺跡に対する要望や期待等について、地元住民と意見交換等を実施	1名
9	令和元年11月22日	小湊町内会住民②	小湊フワガネク遺跡に対する要望や期待等について、地元住民と意見交換等を実施	1名
10	令和元年11月26日	小湊婦人会	小湊フワガネク遺跡に対する要望や期待等について、地元住民と意見交換等を実施	5名
11	令和元年11月27日	小湊町内会住民③	小湊フワガネク遺跡に対する要望や期待等について、地元住民と意見交換等を実施	1名
12	令和元年11月28日	小湊町内会住民④	小湊フワガネク遺跡に対する要望や期待等について、地元住民と意見交換等を実施	1名
13	令和元年12月4日	奄美市立小湊小学校	小湊フワガネク遺跡の現状と課題、要望等について、教員と意見交換を実施	2名

表2 地域懇談会の開催

## (3) 自然環境調査・生業関係調査

史跡小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘地について、過去の調査研究だけでは情報が十分ではない地形、植生、生物分布等の自然環境調査や生業関係調査も、この間に実施した。

	調査期日	調査内容	調査実施者
1	平成31年3月22日	史跡が所在する海浜の植生分布調査	高美喜男（奄美市文化財保護審議会委員） 平城達哉（奄美市教育委員会文化財課）
2	平成31年3月25日	史跡が所在する砂丘前方斜面の植生分布調査	高美喜男（奄美市文化財保護審議会委員） 平城達哉（奄美市教育委員会文化財課）
3	平成31年3月26日	史跡が所在する砂丘後方斜面の植生分布調査	高美喜男（奄美市文化財保護審議会委員） 平城達哉（奄美市教育委員会文化財課）

4	平成 31 年 3 月 25 日 ～3 月 27 日	①奄美市笠利町大字用・笠利・宇宿, ②奄美市名瀬大字小湊・奄美市住用町大字城・瀬戸内町大字嘉徳, ③奄美市名瀬大字小湊・龍郷町大字安木場・奄美市笠利町大字宇宿の砂丘地形調査	羽田麻美 (琉球大学国際地域創造学部准教授) 高梨 修 (奄美市教育委員会文化財課)
5	令和元年 7 月 15 日	史跡周辺の畑地で栽培されている農作物の聞き取り調査 40 代女性	喜友名正弥 (奄美市教育委員会文化財課)
6	令和元年 11 月 16 日	史跡周辺の畑地で栽培されている農作物の聞き取り調査 40 代女性	喜友名正弥 (奄美市教育委員会文化財課)
7	令和元年 12 月 2 日	史跡が所在する砂丘地の哺乳類・両生類・爬虫類・昆虫の生息分布確認 (聞き取り調査)	西 真弘 (奄美マングースバスターズ) 平城達哉 (奄美市教育委員会文化財課)
8	令和元年 12 月 2 日	史跡が所在する砂丘地の鳥類の生息分布確認 (聞き取り調査)	高美喜男 (奄美市文化財保護審議会委員) 平城達哉 (奄美市教育委員会文化財課)
9	令和元年 12 月 11 日 ～12 月 13 日	①奄美市笠利町大字万屋・万屋グスク遺跡・宇宿貝塚・城間トフル墓, ②奄美市住用町大字城・城サモト遺跡・城カネクダ遺跡・瀬戸内町大字嘉鉄・阿木名・節子・網野子, ③奄美市名瀬大字小湊・宇宿貝塚の砂丘地形調査	羽田麻美 (琉球大学国際地域創造学部准教授) 喜友名正弥 (奄美市教育委員会文化財課)
10	令和元年 12 月 14 日	史跡周辺の畑地で栽培されている農作物の聞き取り調査 70 代・80 代・90 代女性, 60 代・80 代男性	喜友名正弥 (奄美市教育委員会文化財課)
11	令和元年 12 月 15 日	農作物の方言呼称に関する聞き取り調査 79 歳・80 歳女性, 86 歳男性	喜友名正弥 (奄美市教育委員会文化財課)
12	令和元年 12 月 20 日	漁労活動, 貝類の方言呼称に関する聞き取り調査 87 歳女性	喜友名正弥 (奄美市教育委員会文化財課)
13	令和 2 年 1 月 30 日	史跡が所在する砂丘地耕作地部分の植生分布調査	高美喜男 (奄美市文化財保護審議会委員) 平城達哉 (奄美市教育委員会文化財課)

表 3 自然環境調査・生業関係調査の実施

### 第 3 節 保存活用計画の位置づけ

奄美市では、暮らしやすいまちづくりを実現するために、「地域に誇りを持てるまちづくり」、「人づくりを中心とするまちづくり」、「また訪れてみたくなるまちづくり」、「自然と共生するまちづくり」の 4 つの基本理念を掲げ、将来都市像「自然・ひと・文化が共につくるきよらの郷～太陽の恵みのもとで、ゆったりとくらす人々が、自然の声を伝えていくまち～」を目指す「基本構想」を定めている（計画期間：10 年間）。

そうしたまちづくりを進めていくため、中期的な施策の体系を、以下の 5 群に整理した「基本計画」がまとめられている（計画期間：5 年間）。

さらに「基本計画」で体系化した施策について、奄美市が目指すまちづくりの将来像に向けて計画的かつ効率的に実施するものとして、重点的、優先的に取り組む必要事業を示した「実施計画」がまとめられている（計画期間：毎年度ローリング）。

以上の奄美市における長期・中期的な施策体系は、市政運営の指針となる「奄美市総合計画」として定められ、現在、平成 28 年度（2016）から令和 2 年度（2020）に至る「後期計画」5 年間で進められている。

本計画は、この「奄美市総合計画」における「実施計画」の一端を担う個別部門計画であり、「奄美市総合計画」における理念をふまえて史跡の保存管理や活用を進めていこうとするものである。

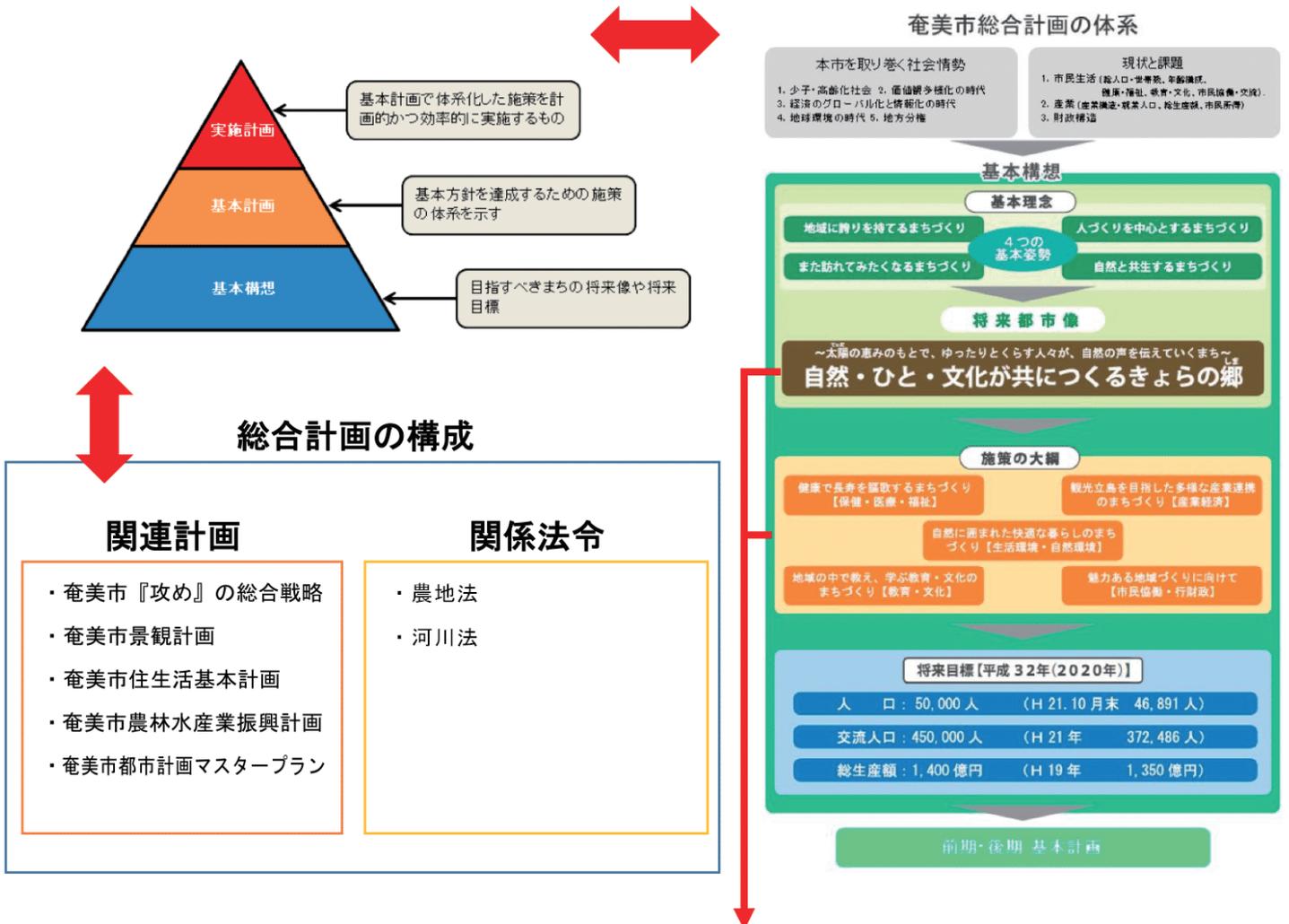
また「奄美市総合計画」における施策群は、「しあわせの島」を目指す観点から相互補完的に膨らませた「奄美市『攻め』の総合戦略」として整理が行われている。本計画は、その基本目標Ⅳに位置づけられるものである。

施策の分野	内 容	キーワード
保健・医療・福祉	[施策の大綱] 健康で長寿を謳歌するまちづくり	健康
	海・川・山に囲まれた豊かな自然環境を活かし、地域住民や市民の心身の健康を保つ空間として、憩いの場、安らぎの場を創出する。	
産業経済	[施策の大綱] 観光立島を目指した多様な産業連携のまちづくり	観光
	調査研究を重ねながら、史跡の本質的価値を一層引き出し、ここでしか見ることができない唯一無二の存在に高め、観光資源として育てていく。	
生活環境・自然環境	[施策の大綱] 自然に囲まれた快適な暮らしのまちづくり	環境
	史跡の保存環境と地域住民の生活環境・景観の調和と保全を図りながら、史跡があるまちにおける良好な住環境の創出を図る。	
教育・文化	[施策の大綱] 地域の中で教え、学ぶ教育・文化のまちづくり	教育
	史跡の価値を損なわないよう恒久的保存を図り、自然の恵みを受けながら営まれていた暮らしを体感、学習できる知的空間として活用・整備していく。また隣接する教育機関と連携し、郷土教育の教材として育てていく。	
市民協働・行財政	[施策の大綱] 魅力ある地域づくりに向けて	協働
	史跡の保存・活用・整備は、持続可能なものとし、行政や研究者だけではなく、積極的な地域住民や市民の参加を促し、市民協働の意識の醸成を目指す。	

表 4 「奄美市総合計画」 施策の大綱における史跡の保存・活用・整備の考え方

基本目標Ⅰ	経済的に自立した島
基本目標Ⅱ	子育てに適した島
基本目標Ⅲ	皆が知恵を出し実行する島
基本目標Ⅳ	豊かな自然と伝統を守る島
	奄美大島にしかない動物や植物をはじめとする貴重な自然を次世代に受け継ぐことは世界の人々から奄美の人々に託された使命です。 また、豊かな自然と歴史が育んできた伝統文化は、奄美のオリジナリティ（独自性）であり、経済的に自立した島になるための重要な資源です。この資源を次世代まで受け継ぐため、市民一人ひとりがこの豊かな自然と伝統を守る島を目指します。

表 5 「奄美市『攻め』の総合戦略（まち・ひと・しごと創生総合戦略）」の基本目標



奄美市教育委員会基本方針

地域に根ざしたふるさと教育 ～あまみの子どもたちを光に～

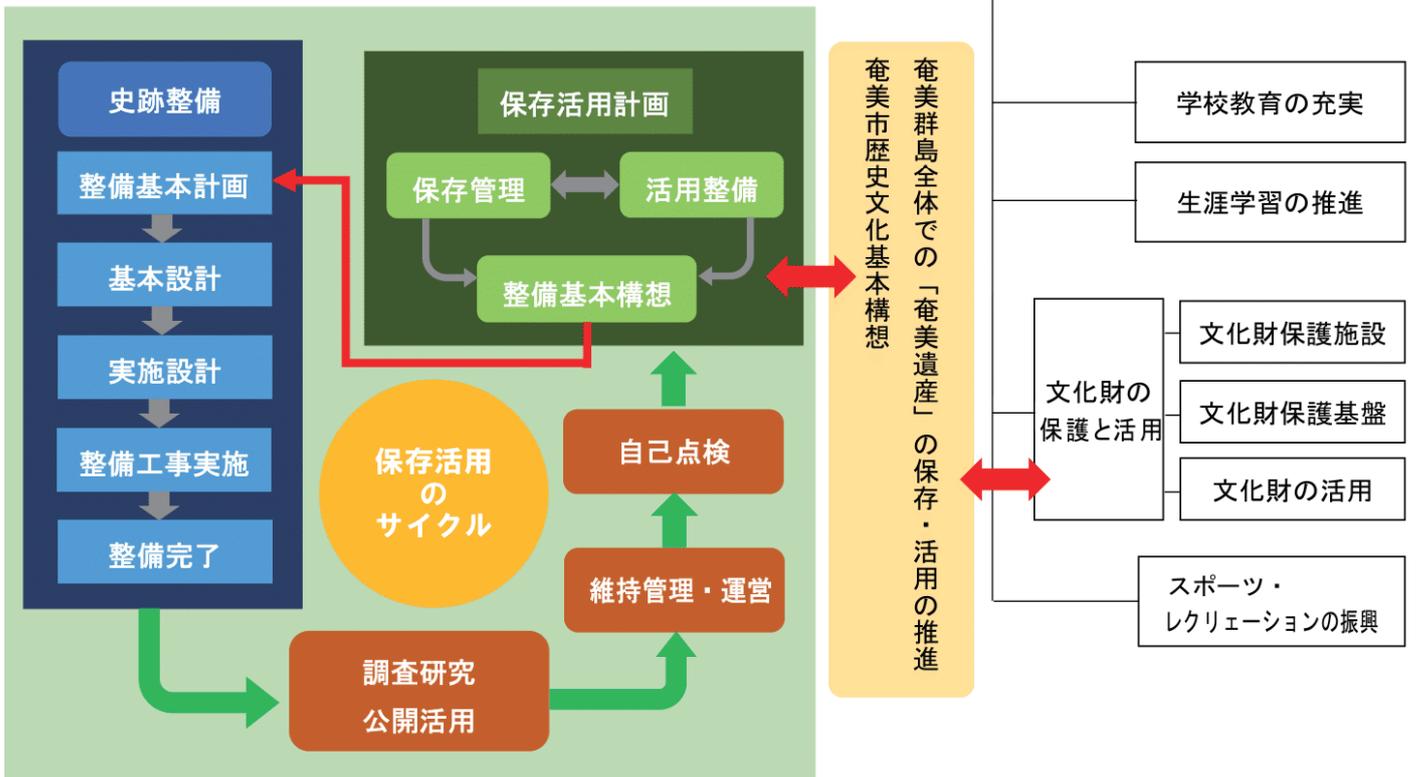


図3 「奄美市総合計画」施策の大綱における史跡保存活用計画の位置づけ

## 第2章 史跡小湊フワガネク遺跡の基本情報

### 第1節 遺跡の周辺環境

#### 1 地理的環境

##### (1) 奄美市

奄美市は、平成18年(2006)3月20日、笠利町・名瀬市・住用町の3市町村が合併して誕生した自治体である。人口は、令和2年(2020)1月31日時点で43,222人を数える奄美群島最大の自治体であり、その中心市街地である名瀬の街は、行政や経済活動の中心的な機能や役割を持つ。

奄美市は、旧自治体の行政区域を踏襲して奄美市笠利町、奄美市名瀬、奄美市住用町の3地区に大別されている。

奄美大島の北半部(龍郷町を除く)に位置する奄美市の地勢は、南北の相違が著しい様相を呈している。北側から南側に目を転じながら、奄美市の地勢と集落を別表にまとめておく(表6)。

##### (2) 古見方地区

小湊フワガネク遺跡が所在する小湊集落は、「古見方」と呼ばれる地区の奄美大島東海岸に面している。古見方地区は、大川(指定延長距離では奄美大島最長)が貫流する広い谷地の沖積地を中心とする地区で、小湊・名瀬勝・前勝・西仲勝・西田・伊津部勝・朝戸・崎原の8集落が営まれている。

「古見方」の名称は、奄美大島の行政統治をめぐる歴史に由来するものである。その来歴については、本節3でも後述するが、琉球国統治時代に七間切に区分されていた奄美大島の行政区画において、当該



図4 奄美大島の位置



図5 奄美市管内図

地区	地勢	集落
奄美市 笠利町	東海岸と西海岸で地勢の相違が著しい。東海岸は台地、西海岸は低い山地が展開する。河川は、小型河川がほとんどであるが、山地が多い西海岸には中型河川もある。 東海岸では平坦地に集落が隣接して営まれるが、西海岸では山地で囲まれた沖積地に集落が営まれ、隣接する集落と山地で隔てられる。東海岸は、サンゴ礁が発達している。	東海岸は、用・笠利（1区・2区・3区）・辺留・須野・崎原・土盛・宇宿・城間・万屋・和野・節田・平・土浜・用安の16集落から成る。 西海岸は、佐仁（1区・2区）・屋仁・川上・赤木名（外金久・中金久・里）・手花部・前肥田・打田原・喜瀬（1区・2区・3区）の13集落から成る。
奄美市 名瀬	ほとんどが山地で占められ、中型河川・大型河川が複数貫流する。谷地の狭い沖積平野を中心に居住空間が形成され、歴史的な行政区分をふまえた「古見方」「上方」「下方」「市街地」の4地区に分けられている。 また主要河川についても、奄美大島の主要二級河川の標高順位10河川中、住用川・役勝川・川内川の3河川が住用町を貫流している。	東海岸に位置する「古見方地区」は、小湊・名瀬勝・前勝・西仲勝・西田・伊津部勝・朝戸・崎原の8集落から成る。 西海岸に位置する「上方地区」は大熊・浦上・有屋・仲勝・有良・芦花部の6集落、「下方地区」は朝仁・小宿・里・福里・知名瀬・根瀬部の6集落から成る。 「市街地地区」も西海岸に位置していて、名瀬湾周辺に形成され、もともと金久と伊津部の2集落から成る。
奄美市 住用町	町域のほとんどは急峻な山地で占められ、奄美大島屈指の大型河川が複数貫流する。奄美大島の主要山岳の標高順位では上位6山が住用町に所在し、住用町の急峻な山岳地形がうかがわれる。 また主要河川についても、奄美大島の主要二級河川の距離では上位2河川が住用町を貫流している。谷地の狭い沖積平野を中心に居住空間が形成され、歴史的な行政区分をふまえた「東城地区」「住用地区」の2地区に分けられている。	「東城地区」は、和瀬・城・摺勝・川内・東仲間・見里の6集落から成る。 「住用地区」は、西仲間・石原・役勝・山間・戸玉・市・青久の7集落から成る。 海岸に面して営まれている集落が少ないのも特徴的で、外洋に面している集落は、和瀬・城・青久の3集落のみである。

表6 奄美市笠利町・名瀬・住用町の地勢

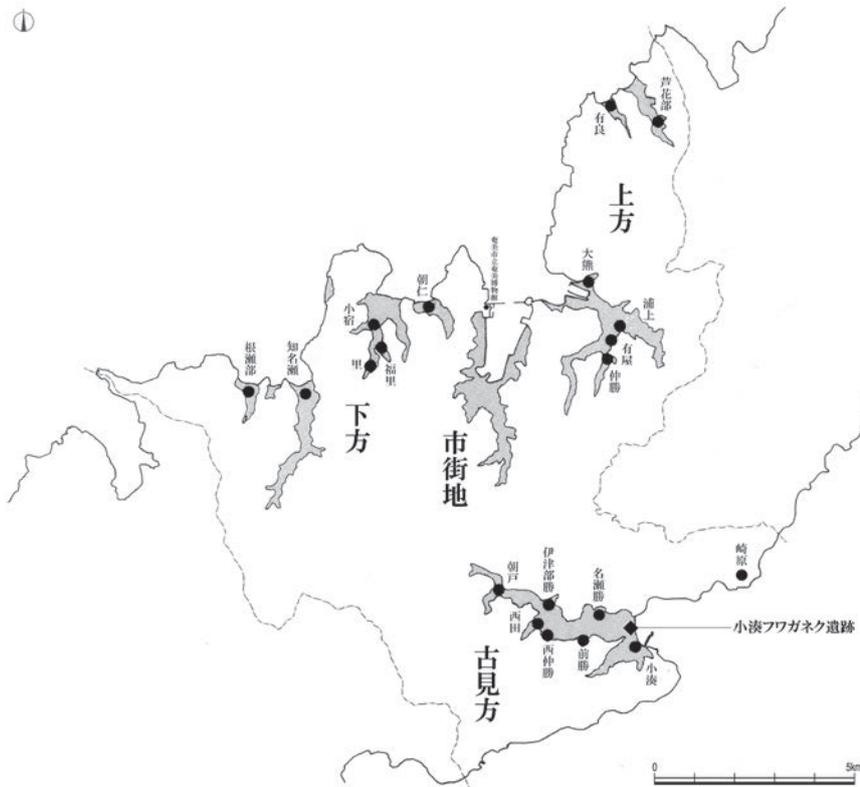


図6 奄美市名瀬の地区区分

地区は「古見間切」に含まれていた。古見間切は、現在の奄美市名瀬の南半地域から龍郷町の南半地域に至る一帯に相当するが、薩摩藩統治時代に「古見方（奄美市名瀬）」と「瀬名方（龍郷町）」に分割されている。その「古見間切古見方」の行政区画が、今日まで地域名称として伝えられている。

### （3）小湊集落

小湊集落は、古見方地区で海岸に面して立地する唯一の集落である。好天候時には、東海上に喜界島を望むことができる。

令和2年1月31日時点で、279世帯・人口424人を数え、古見方地区8集落の中で最大規模を誇る。

小湊集落の海岸線には、南北約1kmにわたり大型砂丘が発達し、南半部分は居住地に、北半部分

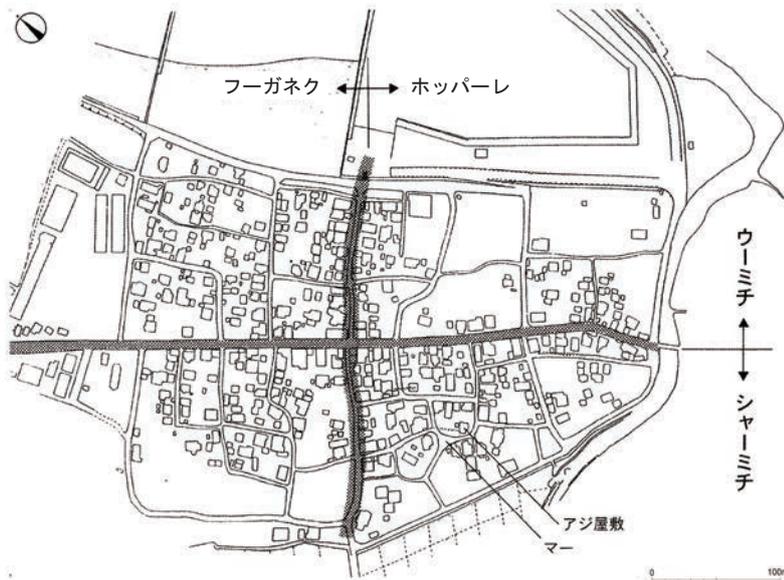


図7 小湊集落の空間区分

は畑地に利用されている。砂丘の標高は、9m前後を測る。

小湊集落の居住地域は、「ホッパーレ（古晴）」と「フーガネク（大金久）」と呼ばれる空間に区分されている。海側に向かい右側がホッパーレ、左側がフーガネクである。フーガネクは、最近では「オオガネク」と呼ばれている。また集落中央を通る「フーミチ」を境として、海側が「ウーミチ」、山側が「シャーミチ」とも区分される。

これらの空間区分を組み合わせ、ウーミチホッパーレ、シャーミチホッパーレ、ウーミチフーガネク、シャーミチフーガネクの4区分が行われ、かつては集落行事等の活動単位とされていた。

ホッパーレには、「マー」と呼ばれる広場があり、隣接して「アジ屋敷」と呼ばれる住宅がある。ここは小湊集落発祥の場所と伝えられ、以下のような伝承がある。

小湊に人が住んでいない時代、イイマランコラという伊平屋島のアジの兄妹がいへやじま駆け落ちして島外に脱出し、小湊の「イスビラ」の海岸に漂着した。二人は、それぞれ巨石を持ちながら山を登り、山頂で石を置いて、その上から周囲を見渡すと平地が見えたので、その平地で暮らしたという。その平地が「マー」の広場であり、二人が暮らした場所が「アジ屋敷」であり、この兄妹が小湊集落の始まりであると言われている。また山頂には、「島建て石」と呼ばれる巨石が二つ実在している。



図8 小湊集落全景（城 康弘氏撮影）

## 2 自然的環境

### (1) 気候

奄美群島は、北緯 27～28 度に位置していて、世界的には中緯度乾燥帯に当たり、砂漠化している地域が多い。しかし、奄美群島は、日本列島で沖縄諸島・先島諸島、小笠原諸島とともに「亜熱帯環流」内に位置している地域であり、その外縁部分を貫流する黒潮とモンスーン（大気循環）の影響により、中緯度乾燥帯には稀な亜熱帯湿潤気候なのである。

奄美市名瀬の年平均気温は 21.6℃と温暖で、鹿児島市に比べて 3.0℃高い。年平均降水量は 2,837.7mm で東京の約二倍の降雨がある。梅雨時期の 5・6 月、台風時期の 8・9・10 月は降水量が多く、さらに 11 月から 4 月も月平均降水量が 150mm を超える日本有数の多雨地域である。年間におけるおおよその季節区分としては、春（3・4 月）、初夏（5・6 月）、夏（7・8 月）、秋（9・10 月）、晩秋（11 月）、冬（12・1・2 月）となる。

### (2) 地形・地質

古見方地区は、山地に立地している崎原集落を除けば、朝戸・西田・伊津部勝・西仲勝・前勝・名瀬勝・小湊の 7 集落が谷地の沖積地に営まれている。谷地に広がる沖積地は、大川が運搬する土砂により形成されたものである。

古見方地区の谷地は、左右を頁岩・砂岩を主体する山地に挟まれ、海岸部分は沖積地を塞ぐように約 1km にわたり砂丘が発達している。奄美大島でも屈指の規模の大型砂丘である。

この砂丘は、完新世新砂丘（約 2,000～3,000 年前以後に形成された砂丘）と理解されているもので、弥生時代並行期以降の遺跡が連綿と分布している。小湊フワガネク遺跡もこの砂丘上に位置している。当該砂丘の背後には、「タチグチシュタ（立口汐田）」「ナーシュタ（中汐田）」「シャーシュタ（下汐田）」等の汽水域を意味するシュタ（汐田）系地名が分布していて、かつては後背湿地が存在していた様子がわかる。

また当該砂丘の背後に、もう一列、砂丘が存在する。この砂丘は、完新世古砂丘（約 6,000～7,000

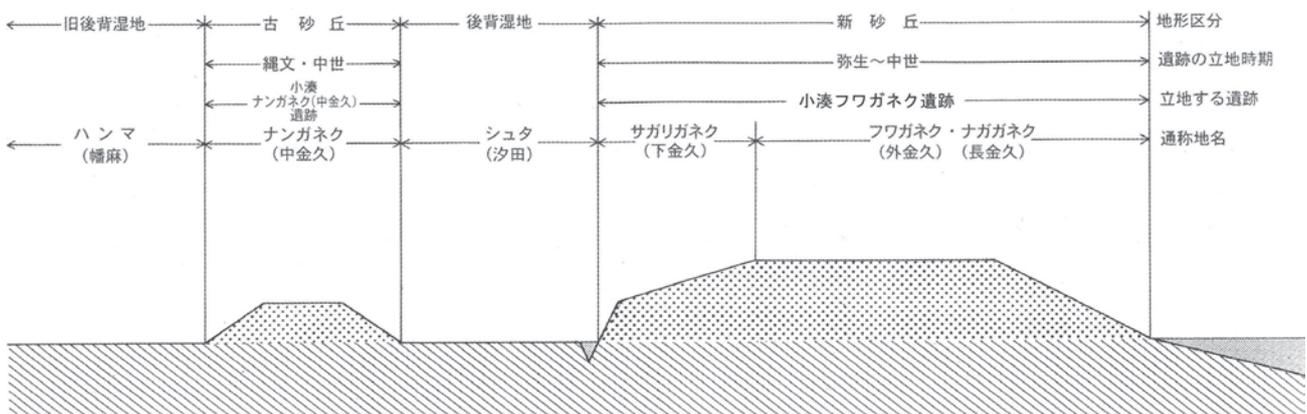


図9 小湊集落の海岸地形断面（模式図）



図 10 小湊地区における海岸線の変化（羽田作成）



図 11 砂サンプルの採取地点

年前より以前に形成されている砂丘)と理解されているもので、縄文時代後期・晩期頃および中世の遺跡が分布している。小字地名で「ナンガネク(中金久)」「ユガネク(横金久)」等の砂地を意味するカネク系地名が分布していて、土地改良事業が行われて畑地が広がる「ユガネク(横金久)」に、かつては砂丘が存在していた様子が見られる。

小湊フワガネク遺跡は、砂丘に所在しているので、砂丘保全の観点から、その形成要因や地形的特徴の理解を深めておく必要がある。そのため、羽田麻美委員(自然地理)と砂丘地形を中心とする自然環境調査を実施した。その調査報告の概要は、以下のとおりである。

史跡が所在する砂丘の海岸線は、国土地理院のウェブ地図「地理院地図」を基に、撮影年代が異なる国土地理院の空撮写真を比較して



図12 砂サンプル採取の様子（大川中流域）

みるならば、著しい変化が生じている様子がわかる（図10）。

昭和53年（1978）の航空写真では、海岸線が大川河口に位置する「鯨松」のあたりに形成されているが、「地理院地図」に示された最新の航空写真では大川河口部分まで後退している。約40年間で、50m前後に及ぶ海岸線の後退がある様子がわかる。こうした海岸の侵食をもたらす一因として、大川により海まで運搬される土砂が密接に関係

しているのではないかと考えられる。

砂丘形成要因の理解の一環として、砂丘砂の起源を確認するため、2回の調査で、小湊フワガネク遺跡周辺14地点、奄美大島の海岸砂丘発達地（奄美市笠利町・住用町、瀬戸内町）14地点の合計28地点から表層1m以内の深度で砂サンプルを採取し（図11）、構成砂の組成・粒径等の比較分析をした。

その結果、サンゴ礁起源の海砂に対して、小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘の砂は、海砂も若干含んでいるが、大川・山田川流域の砂に類似したものが主体を占めていたため（図13・図14）、大川・山田川から供給された川砂主体の混合砂と理解できそうである。

一方、新砂丘の後方に位置する「ナンガネク（中金久）」の古砂丘砂については、サンゴ礁起源の海砂は認められず、大川起源と考えられる川砂主体で構成されていた。そのことから、新砂丘と古砂丘の形成時期が異なることを示しており、古砂丘形成の時期にはサンゴ礁は現在よりも発達し

ていなかった可能性が考えられそうである。

海岸線後退の原因として、大川流域の畑地灌漑用水と市街地下水道の供給を目的として、昭和55年（1980）、大川上流に「大川多目的ダム」が完成しているため、当該ダムによる大川の土砂供給が減少したため、海岸侵食が進行しはじめた可能性がある。

また昭和52年（1977）には、「小湊漁

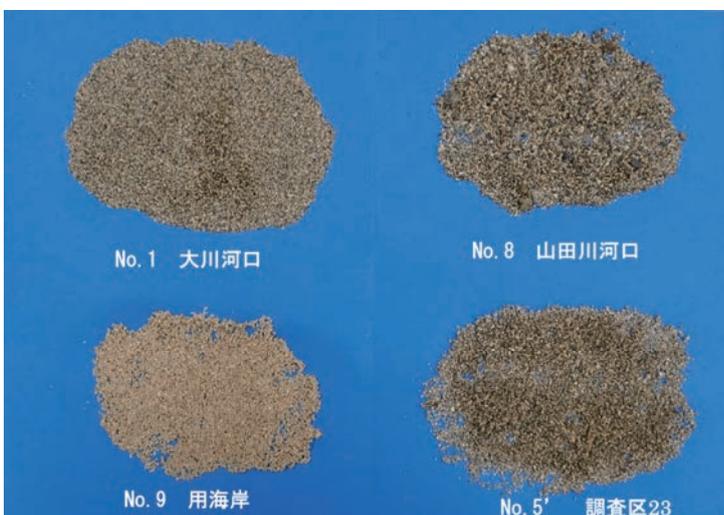


図13 砂サンプルの比較①



小湊フワガネク遺跡調査区 23 (0~40cm 深)



大川河口



山田川河口



用海岸

図 14 砂サンプルの比較② (拡大)



図 15 植生分布調査の地区区分

港」の整備が完成しているので、当該漁港の棧橋による沿岸流の変化も、海岸侵食の一因として考えられる。

小湊フワガネク遺跡が立地する砂丘地形については、外縁部分をコンクリート製護岸が敷設され、斜面地にはアダン等の海岸植生が認められ、砂丘地形の侵食箇所等は認められない。

### (3) 植生

今回の史跡保存活用計画の策定に際し、小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘地一帯の植生について、あらためて分布調査を実施し、植生分布を確認した。

砂丘地を地形から 4 大別し、海側から①海浜、②砂丘前方斜面、③砂丘平坦地、④砂丘後方斜面に整理して (図 15)、その植生分布を示す。



図 16 ギンネム



図 17 トキワギョリュウ



図 18 アカギ



図 19 アダン

①～④において、遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる植物種は、アカギ、ギンネム、トキワギョリュウの3種が認められた。これらは、すべて奄美大島へ移入されたもので、大木になると深く根を張る樹木であることから、遺跡の保存に影響を及ぼす恐れがあると考えられる。

①海浜は、グンバイヒルガオ、ハマオモト、キダチハマグルマ等、奄美大島の海浜植生として一般的な植物の生育が確認された。②前方斜面、③平坦地、④後方斜面には、遺跡に影響を及ぼす可能性のある3種が散在的に生育していた。特に、アカギとギンネムは、幼木も多く確認されたので、今後の生育状況の変化を十分に注意する必要がある。

①海浜の植生分布

		目名	科名	和名	学名
1	高木	バラ目	クワ科	シマグワ	<i>Morus australis</i>
2		タコノキ目	タコノキ科	アダン	<i>Pandanus odoratissimus</i>
3		マメ目	マメ科	ギンネム	<i>Leucaena leucocephala</i>
4		バラ目	バラ科	シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis umbellata</i>
5		セリ目	トベラ科	トベラ	<i>Pittosporum tobira</i>
6	つる性	クスノキ目	クスノキ科	スナヅル	<i>Cassytha filiformis</i>
7		マメ目	マメ科	ハマアズキ	<i>Vigna marina</i>
8		マメ目	マメ科	スズメノエンドウ	<i>Vicia hirsuta</i>
9		ナス目	ヒルガオ科	ゲンバイヒルガオ	<i>Ipomoea pes-caprae</i>
10		ナス目	ヒルガオ科	ハマヒルガオ	<i>Calystegia soldanella</i>
11		ナス目	ヒルガオ科	ノアサガオ	<i>Ipomoea congesta</i>
12		キク目	キク科	キダチハマグルマ	<i>Wedelia biflora</i>
13	草本	ユリ目	ユリ科	テッポウユリ	<i>Lilium longiflorum</i>
14		キジカクシ目	ヒガンバナ科	ハマオモト	<i>Crinum asiaticum</i>
15		キジカクシ目	クサスギカズラ科	ヤブラン	<i>Liriope tawadae</i>
16		イネ目	イネ科	クロイワザサ	<i>Thuarea involuta</i>
17		イネ目	イネ科	チガヤ	<i>Imperata cylindrica var. koenigii</i>
18		イネ目	イネ科	ダンチク	<i>Arundo donax</i>
19		マメ目	マメ科	シナガワハギ	<i>Raphanus sativus raphanistroides</i>
20		バラ目	バラ科	ナワシロイチゴ	<i>Rubus parvifolius</i>
21		キントラノオ目	スマレ科	リュウキュウコスミレ	<i>Viola philippica</i>
22		カタバミ目	カタバミ科	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>
23		アブラナ目	アブラナ科	ハマダイコン	<i>Raphanus sativus raphanistroides</i>
24		フトモモ目	アカバナ科	コマツヨイグサ	<i>Oenothera speciosa</i>
25		ナデシコ目	ハマミズナ科	ツルナ	<i>Tetragonia tetragonioides</i>
26		ナデシコ目	ヒユ科	マルバアカザ	<i>Chenopodium acuminatum</i>
27		ナデシコ目	ナデシコ科	オランダミミナグサ	<i>Anagallis foemina</i>
28		ナデシコ目	タデ科	スイバ	<i>Rumex acetosa</i>
29		ナデシコ目	タデ科	ギンギン	<i>Rumex japonicus</i>
30		ツツジ目	サクラソウ科	ハマボッス	<i>Lysimachia mauritiana</i>
31		ツツジ目	サクラソウ科	ルリハコベ	<i>Anagallis foemina</i>
32		キク目	キク科	シロノセンダングサ	<i>Bidens pilosa var. minor</i>
33		キク目	キク科	オオジシバリ	<i>Ixeris debilis</i>
34		キク目	キク科	アキノゲシ	<i>Lactuca indica var. indica</i>
35		セリ目	セリ科	ハマウド	<i>Angelica japonica</i>

※高木: 3m以上  
 ※中木: 1.5m~3m  
 ※低木: 1.5m以下

遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる種  
 株が成長し大きくなった場合、遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる種

表 7 海浜の植生一覧

②砂丘前方斜面の植生分布

	高さ	目名	科名	和名	学名
	1	クスノキ目	クスノキ科	タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i>
	2	クスノキ目	クスノキ科	ヤブニツケイ	<i>Cinnamomum japonicum</i>
	3	クスノキ目	クスノキ科	ハマビワ	<i>Litsea japonica</i>
	4	タコノキ目	タコノキ科	アダン	<i>Pandanus odoratissimus</i>
	5	ヤシ目	ヤシ科	ビロウ	<i>Livistona chinensis</i>
	6	マメ目	マメ科	ギンネム	<i>Leucaena leucocephala</i>
	7	バラ目	クワ科	シマグワ	<i>Morus australis</i>
	8	バラ目	クワ科	ガジュマル	<i>Ficus microcarpa</i>
	9	バラ目	クワ科	イヌビワ	<i>Ficus erecta</i>
	10	バラ目	アサ科	ウラジロエノキ	<i>Trema orientalis</i>
	11	キントラノオ目	ミカンソウ科	オオシマコバンノキ	<i>Breynia officinalis</i>
	12	キントラノオ目	ミカンソウ科	アカギ	<i>Bischofia javanica</i>
	13	キントラノオ目	トウダイグサ科	オオバギ	<i>Macaranga tanaius</i>
	14	アオイ目	アオイ科	フツソウゲ	<i>Hibiscus rosa-sinensis</i>
	15	アオイ目	アオイ科	オオハマボウ	<i>Hibiscus tiliaceus</i>
	16	ムクロジ目	ミカン科	ゲッキツ	<i>Murraya paniculata</i>
	17	ツツジ目	サクラソウ科	モクダチバナ	<i>Ardisia sieboldii</i>
	18	シソ目	シソ科	ミツハハマコウ	<i>Vitex trifolia</i>
	19	セリ目	ウコギ科	タラノキ	<i>Aralia elata</i>
	20	セリ目	トベラ科	トベラ	<i>Pittosporum tobira</i>
	21	ソテツ目	ソテツ科	ソテツ	<i>Cycas revoluta</i>
	22	バラ目	バラ科	テリハノイバラ	<i>Rosa wichuraiana</i>
	23	バラ目	バラ科	リュウキュウバライチゴ	<i>Rubus rosaefolius</i>
	24	ニシキギ目	ニシキギ科	ハリツルマサキ	<i>Maytenus diversifolia</i>
	25	シソ目	クマツヅラ科	ランタナ	<i>Lantana camara</i>
	26	コショウ目	コショウ科	フウトウカズラ	<i>Piper kadzura</i>
	27	マツモ目	キンボウゲ科	センニンソウ	<i>Clematis terniflora</i>
	28	マメ目	マメ科	ハマアズキ	<i>Vigna marina</i>
	29	マメ目	マメ科	スズメノエンドウ	<i>Vicia hirsuta</i>
	30	バラ目	クワ科	オオイタビ	<i>Ficus pumila</i>
	31	バラ目	クワ科	ヒメイタビ	<i>Ficus thunbergii</i>
	32	ブドウ目	ブドウ科	テリハノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>
	33	ナス目	ヒルガオ科	ノアサガオ	<i>Ipomoea congesta</i>
	34	ナス目	ヒルガオ科	グンバイヒルガオ	<i>Ipomoea pes-caprae</i>
	35	ナス目	ヒルガオ科	オキナワテイカズラ	<i>Trachelospermum gracilipes</i> var. <i>liukuense</i>
	36	リンドウ目	アカネ科	ヘクソカズラ	<i>Paederia scandens</i>
	37	ユリ目	ユリ科	テッポウユリ	<i>Lilium longiflorum</i>
	38	キジカクシ目	アヤメ科	グラジオラス	<i>Gladiolus gandavensis</i>
	39	キジカクシ目	ワスレグサ科	キキョウラン	<i>Dianella ensifolia</i>
	40	キジカクシ目	ヒガンバナ科	ハマオモト	<i>Crinum asiaticum</i>
	41	キジカクシ目	クサスギカズラ科	ヤブラン	<i>Liriope tawadae</i>
	42	イネ目	イネ科	ダンチク	<i>Arundo donax</i>
	43	シユウガ目	シユウガ科	ゲツトウ	<i>Alpina speciosa</i>
	44	ツユクサ目	ツユクサ科	ホウライツユクサ	<i>Commelina auriculata</i>
	45	マツモ目	ケシ科	キケマン	<i>Corydalis heterocarpa</i>
	46	マメ目	マメ科	シナガワハギ	<i>Melilotus officinalis</i>
	47	マメ目	マメ科	コメツブマゴヤシ	<i>Medicago lupulina</i>
	48	バラ目	イラクサ科	ツルマオ	<i>Gonostegia hirta</i>
	49	バラ目	イラクサ科	カラムシ	<i>Boehmeria nivea</i> var. <i>nipponivea</i>
	50	カタバミ目	カタバミ科	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis debukus</i> var. <i>corymbosa</i>
	51	カタバミ目	カタバミ科	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>
	52	キントラノオ目	スミレ科	リュウキュウコスミレ	<i>Viola philippica</i>
	53	アブラナ目	アブラナ科	ハマダイコン	<i>Raphanus sativus raphanistroides</i>
	54	フクロソウ目	フクロソウ科	アメリカフウロ	<i>Geranium carolinianu</i>
	55	ナデシコ目	ヒユ科	マルバアカザ	<i>Chenopodium acuminatum</i>
	56	ナデシコ目	ナデシコ科	オランダミミナグサ	<i>Cerastium glomeratum</i>
	57	ナデシコ目	ナデシコ科	ノミノツツリ	<i>Arenaria serpyllifolia</i>
	58	ナデシコ目	タデ科	スイバ	<i>Rumex acetosa</i>
	59	ナデシコ目	タデ科	ツルソバ	<i>Polygonum chinense</i>
	60	ナデシコ目	タデ科	ギンギシ	<i>Rumex japonicus</i>
	61	ツツジ目	サクラソウ科	ルリハコベ	<i>Anagallis foemina</i>
	62	ツツジ目	サクラソウ科	ハマボウス	<i>Lysimachia mauritiana</i>
	63	ツツジ目	サクラソウ科	リュウキュウコザクラ	<i>Androsace umbellata</i>
	64	シソ目	シソ科	コナミキ	<i>Scutellaria guilielmii</i>
	65	シソ目	シソ科	オニキランソウ	<i>Ajuga elatior</i>
	66	シソ目	クマツヅラ科	アレチハナガサ	<i>Verbena brasiliensis</i>
	67	リンドウ目	アカネ科	ヤエムグラ	<i>Galium spurium</i> var. <i>echinospermon</i>
	68	キク目	キク科	シロノセンダングサ	<i>Bidens pilosa</i> var. <i>minor</i>
	69	キク目	キク科	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i>
	70	キク目	キク科	ノゲシ	<i>Sonchus oleraceus</i>
	71	キク目	キク科	ニシヨモギ	<i>Artemisia indica</i> var. <i>indica</i>
	72	キク目	キク科	オオジシバリ	<i>Ixeris debilis</i>
	73	キク目	キク科	セイヨウタンポポ	<i>Taraxacum officinale</i>
	74	キク目	キク科	シマアザミ	<i>Cirsium brevicaule</i>
	75	キク目	キク科	ハハコグサ	<i>Gnaphalium affine</i>
	76	キク目	キク科	アメリカハマグルマ	<i>Sphagneticola trilobata</i>
	77	キク目	キク科	キダチハマグルマ	<i>Melanthera biflora</i> var. <i>biflora</i>
	78	キク目	キク科	ホノバワダン	<i>Crepidiastrum lanceolatum</i> var. <i>lanceolatum</i>
	79	セリ目	セリ科	ボタンボウフウ	<i>Peucedanum japonicum</i>
	80	セリ目	セリ科	ヤブジラミ	<i>Torilis japonica</i>
	81	セリ目	セリ科	ハマウド	<i>Angelica japonica</i>
	82	ウラボシ目	ヒメシダ科	ホシダ	<i>Thelypteris acuminata</i>
	83	ウラボシ目	ツルシダ科	タマシダ	<i>Nephrolepis auriculata</i>

     遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる種  
     株が成長し大きくなった場合、遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる種

表 8 砂丘前方斜面の植生一覧

③砂丘平坦地の植生分布

	高さ	目名	科名	和名	学名
1	高木	クスノキ目	クスノキ科	ハマビワ	<i>Litsea japonica</i>
2		タコノキ目	タコノキ科	アダン	<i>Pandanus odoratissimus</i>
3		ヤシ目	ヤシ科	ビロウ	<i>Livistona chinensis</i>
4		マメ目	マメ科	ギンネム	<i>Leucaena leucocephala</i>
5		バラ目	クワ科	シマグワ	<i>Morus australis</i>
6		バラ目	クワ科	ガジュマル	<i>Ficus microcarpa</i>
7		バラ目	クワ科	ハマイスビワ	<i>Ficus virgate</i>
8		バラ目	アサ科	ウラジロエノキ	<i>Trema orientalis</i>
9		バラ目	バラ科	シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis umbellata</i>
10		ニシキギ目	ニシキギ科	マサキ	<i>Euonymus japonicus</i>
11		ブナ目	モクマオウ科	トキワギョリュウ	<i>Casuarina equisetifolia</i>
12		キントラノオ目	ミカンソウ科	オオシマコバンノキ	<i>Breynia officinalis</i>
13		キントラノオ目	ミカンソウ科	アカギ	<i>Bischofia javanica</i>
14		キントラノオ目	トウダイグサ科	ナンキンハゼ	<i>Triadica sebifera</i>
15		アオイ目	アオイ科	ブツウゲ	<i>Hibiscus rosa-sinensis</i>
16		アオイ目	アオイ科	オオハマボウ	<i>Hibiscus tiliaceus</i>
17		ムクロジ目	ミカン科	ゲッキツ	<i>Murraya paniculata</i>
18		ムクロジ目	ウルシ科	ハゼノキ	<i>Toxicodendron succedaneum</i>
19		ツツジ目	サクラソウ科	モクダチバナ	<i>Ardisia sieboldii</i>
20		シソ目	シソ科	ミツバハマゴウ	<i>Vitex trifolia</i>
21		シソ目	シソ科	オオムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i>
22		セリ目	ウコギ科	タラノキ	<i>Aralia elata</i>
23		セリ目	トベラ科	トベラ	<i>Pittosporum tobira</i>
24		中木	ソテツ目	ソテツ科	ソテツ
25	バラ目	バラ科	テリハノイバラ	<i>Rosa wichuraiana</i>	
26	低木	キジカクシ目	クサスギカズラ科	センネンボク	<i>Cordyline fruticosa</i>
27	ニシキギ目	ニシキギ科	ハリツルマサキ	<i>Maytenus diversifolia</i>	
28	シソ目	クマツツラ科	ランタナ	<i>Lantana camara</i>	
29	つる性	ユリ目	サルトリイバラ科	ハマサルトリイバラ	<i>Smilax sebeana</i>
30		ユリ目	サルトリイバラ科	カラスキバサンキライ	<i>Heterosmilax japonica</i>
31		マツモ目	ツツラフジ科	ハスノハカズラ	<i>Stephania japonica</i>
32		マメ目	マメ科	スズメノエンドウ	<i>Vicia hirsuta</i>
33		ウリ目	ウリ科	クロミノオキナワズメ	<i>Zehneria guamensis</i>
34		バラ目	クワ科	オオイタビ	<i>Ficus pumila</i>
35		ブドウ目	ブドウ科	テリハノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>
36		ナス目	ヒルガオ科	ノアサガオ	<i>Ipomoea congesta</i>
37		ナス目	ヒルガオ科	オキナワテイカカズラ	<i>Trachelospermum gracilipes</i> var. <i>liukiense</i>
38		リンドウ目	アカネ科	ヘクソカズラ	<i>Paederia scandens</i>
39	草本	ユリ目	ユリ科	テッポウユリ	<i>Lilium longiflorum</i>
40		キジカクシ目	アヤメ科	グラジオラス	<i>Gladiolus gandavensis</i>
41		キジカクシ目	ヒガンバナ科	ハマオモト	<i>Crinum asiaticum</i>
42		キジカクシ目	クサスギカズラ科	ヤブラン	<i>Liriope tawadae</i>
43		イネ目	イネ科	ダンチク	<i>Arundo donax</i>
44		ショウガ目	ショウガ科	ゲットウ	<i>Alpina speciosa</i>
45		マツモ目	ケシ科	キケマン	<i>Corydalis heterocarpa</i>
46		マメ目	マメ科	シナガワハギ	<i>Melilotus officinalis</i>
47		マメ目	マメ科	コメツブウマゴヤシ	<i>Medicago lupulina</i>
48		バラ目	イラクサ科	カラムシ	<i>Boehmeria nivea</i> var. <i>nipponivea</i>
49		カタバミ目	カタバミ科	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis debukus</i> var. <i>corymbosa</i>
50		カタバミ目	カタバミ科	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>
51		キントラノオ目	スミレ科	リュウキュウコスミレ	<i>Viola philippica</i>
52		アブラナ目	アブラナ科	ハマダイコン	<i>Raphanus sativus raphanistroides</i>
53		フクロソウ目	フクロソウ科	アメリカフウロ	<i>Geranium carolinianum</i>
54		ナデシコ目	ナデシコ科	オランダミミナグサ	<i>Cerastium glomeratum</i>
55		ナデシコ目	タデ科	ツルソバ	<i>Polygonum chinense</i>
56		ツツジ目	サクラソウ科	ルリハコベ	<i>Anagallis foemina</i>
57		ツツジ目	サクラソウ科	ハマボツス	<i>Lysimachia mauritiana</i>
58		シソ目	シソ科	コナミキ	<i>Scutellaria guillelmii</i>
59	シソ目	クマツツラ科	アレチハナガサ	<i>Verbena brasiliensis</i>	
60	リンドウ目	キョウチクトウ科	トウワタ	<i>Asclepias curassavica</i>	
61	リンドウ目	アカネ科	ヤエムグラ	<i>Galium spurium</i> var. <i>echinospermon</i>	
62	キク目	キク科	シロノセンダングサ	<i>Bidens pilosa</i> var. <i>minor</i>	
63	キク目	キク科	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i>	
64	キク目	キク科	ノゲシ	<i>Sonchus oleraceus</i>	
65	キク目	キク科	ニシヨモギ	<i>Artemisia indica</i> var. <i>indica</i>	
66	キク目	キク科	セイヨウタンポポ	<i>Taraxacum officinale</i>	
67	キク目	キク科	アメリカハマグルマ	<i>Sphagneticola trilobata</i>	
68	セリ目	セリ科	ヤブジラミ	<i>Torilis japonica</i>	
69	ウラボシ目	ツルシダ科	タマシダ	<i>Nephrolepis auriculata</i>	

遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる種  
 株が成長し大きくなった場合、遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる種

表 9 砂丘平坦地の植生一覧

④砂丘後方斜面の植生分布

	高さ	目名	科名	和名	学名
1	高木	クスノキ目	クスノキ科	ハマビワ	<i>Litsea japonica</i>
2		タコノキ目	タコノキ科	アダン	<i>Pandanus odoratissimus</i>
3		マメ目	マメ科	ギンネム	<i>Leucaena leucocephala</i>
4		ヤシ目	ヤシ科	クロツグ	<i>Arenga engleri</i>
5		ブナ目	ブナ科	アマミアカシ	<i>Quercus glauca var. amamiana</i>
6		バラ目	アサ科	ウラジロエノキ	<i>Trema orientalis</i>
7		バラ目	アサ科	クワノハエノキ	<i>Celtis boninensis</i>
8		バラ目	クワ科	シマグワ	<i>Morus australis</i>
9		バラ目	クワ科	カジノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i>
10		バラ目	クワ科	イヌビワ	<i>Ficus erecta</i>
11		バラ目	クワ科	ガジュマル	<i>Ficus microcarpa</i>
12		バラ目	バラ科	カンヒザクラ	<i>Cerasus campanulata</i>
13		バラ目	バラ科	バクチノキ	<i>Prunus zippaliana</i>
14		カタバミ目	ホルトノキ科	ホルトノキ	<i>Elaeocarpus sylvestris</i>
15		キントラノオ目	トウダイグサ科	オオバギ	<i>Macaranga tanarius</i>
16		キントラノオ目	ミカンソウ科	アカギ	<i>Bischofia javanica</i>
17		キントラノオ目	ツゲモドキ科	ツゲモドキ	<i>Dripetes karapinensis</i>
18		アオイ目	アオイ科	オオハマボウ	<i>Hibiscus tiliaceus</i>
19		ムクロジ目	ウルシ科	ハゼノキ	<i>Rhus succedanea</i>
20		ムクロジ目	センダン科	センダン	<i>Melia azedarach</i>
21		ムクロジ目	ミカン科	ゲッキツ	<i>Murraya paniculata</i>
22		ツツジ目	サクラソウ科	モクタチバナ	<i>Ardisia siebordii</i>
23		ツツジ目	アカテツ科	アカテツ	<i>Planchonella obovata</i>
24		ムラサキ目	ムラサキ科	カキバチシャノキ	<i>Cordia dichotoma</i>
25		シソ目	シソ科	オオムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i>
26		シソ目	シソ科	ミツバハマゴウ	<i>Vitex trifolia</i>
27		シソ目	クマツヅラ科	アマクサギ	<i>Clerodendrum trichotomum var. fargesii</i>
28		シソ目	クマツヅラ科	タイワンウオクサギ	<i>Premna corymbasa obtusifolia</i>
29		リンドウ目	アカネ科	クチナシ	<i>Gardenia jasminoides</i>
30		セリ目	ウコギ科	タラノキ	<i>Aralia elata</i>
31		タケ目	タケ科	リョクチク	<i>Bambusa oldhami</i>
32	中木	ムラサキ目	ムラサキ科	フクマンギ	<i>Carmona retusa</i>
33		シソ目	クマツヅラ科	イボタクサギ	<i>Clerodendron inerme</i>
34		ソテツ目	ソテツ科	ソテツ	<i>Cycas revoluta</i>
35	低木	キジカクシ目	クサスギカズラ科	センネンボク	<i>Cordyline fruticosa</i>
36	つる性	コショウ目	コショウ科	フウトウカズラ	<i>Piper kadzura</i>
37		ユリ目	サルトリイバラ科	ハマサルトリイバラ	<i>Smilax sebeana</i>
38		ユリ目	サルトリイバラ科	サツマサンキライ	<i>Smilax bracteata</i>
39		キンポウゲ目	ツヅラフジ科	ハスノハカズラ	<i>Stephania japonica</i>
40		ウリ目	ウリ科	クロミノオキナワズズメウリ	<i>Melothria liukuensis</i>
41		ブドウ目	ブドウ科	テリハノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>
42		ナス目	ヒルガオ科	ノアサガオ	<i>Ipomoea congesta</i>
43		リンドウ目	キョウチクトウ科	オキナワテイカカズラ	<i>Trachelospermum gracilipes var. liukuense</i>
44		キク目	キク科	キダチハマグルマ	<i>Wedelia biflora</i>
45	草本	ショウブ目	サトイモ科	クワズイモ	<i>Alocasia odora</i>
46		イネ目	カヤツリグサ科	オオアブラガヤ	<i>Scirpus tematanus</i>
47		イネ目	イネ科	セイタカヨシ	<i>Phragmites karka</i>
48		イネ目	イネ科	ダンチク	<i>Arundo donax</i>
49		ショウガ目	ショウガ科	ゲットウ	<i>Alpina speciosa</i>
50		キンポウゲ目	キンポウゲ科	キツネノボタン	<i>Ranunculus glaber</i>
51		バラ目	アサ科	カナムグラ	<i>Humulus scandens</i>
52		バラ目	イラクサ科	カラムシ	<i>Boehmeria nivea var. nippononivea</i>
53		ナデシコ目	タデ科	ツルソバ	<i>Polygonum chinense</i>
54		ナデシコ目	タデ科	オオサクラタデ	<i>Persicaria glabra</i>
55		ナデシコ目	タデ科	ギンギシ	<i>Rumex japonicus</i>
56		シソ目	シソ科	オニキランソウ	<i>Ajuga elatior</i>
57		ナス目	ナス科	テリミノイヌホオズキ	<i>Solanum nodiflorum</i>
58		キク目	キク科	シロノセンダングサ	<i>Bidens pilosa var. minor</i>
59		キク目	キク科	ツツブキ	<i>Farfugium japonicum</i>
60		ウラボシ目	コバノイシカグマ科	イシカグマ	<i>Microlepia strigosa</i>
61	ウラボシ目	ヒメシダ科	ホシダ	<i>Thelypteris acuminata</i>	

遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる種  
 株が成長し大きくなった場合、遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる種

表 10 砂丘後方斜面の植生一覧

#### (4) 動物

遺跡が所在する砂丘地について、植生と同様、動物の分布についても、その分布を示す。

動物分布については、長期間による観察が必要になるため、この砂丘一帯の動物に詳しい専門家による聞き取り調査を実施した。その調査結果は、以下のとおりである。

多数の動物種の生息が認められたが、全体として、遺跡に影響を及ぼす可能性のある種は確認されなかった。

##### ①哺乳類

小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘地に生息している哺乳類は4種である。その中で、地面を掘り起こす行動をとるのは、ワタセジネズミとリュウキュウイノシシであるが、遺跡の保存に影響を及ぼすほどの深度ではない。

##### ②鳥類

奄美大島で観察できるほとんどの留鳥が、小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘地に生息している。遺跡に影響を及ぼす可能性のある種はない。以前は、猟友会によってキジが放たれていたが、昭和の終わり頃から放鳥は行われなくなった。3年前から見かける機会がなくなったため、既に生息していない可能性もあり、リストには入れていない。また、掲載していない種でも、渡り鳥の中継地として多くの鳥類が利用している可能性が考えられる。

##### ③両生類

奄美大島の山地に生息する種以外は、すべて小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘地の範囲内で確認されている。小湊フワガネク遺跡一帯は、ヌマガエルの優占度が非常に高い。

##### ④爬虫類

奄美大島に生息する爬虫類のほとんどが、小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘地で確認されている。ヤモリ科については、より詳細な調査を実施することで、種数が増える可能性がある。ヘリグロヒメトカゲ及びアオカナヘビは、環境的に生息している可能性が高いが、現時点では確認が取れていないため、保留扱い（括弧付き）にしている。小湊フワガネク遺跡一帯の砂地には、地中で活動するブラーミニメクラヘビが多く認められるが、遺跡に影響を及ぼすほどの深度では活動しない。

##### ⑤昆虫類

小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘地には、多くの昆虫類が生息している。代表する種としては、ラデンキンカメムシ・アシプトメミズムシ・サキシマケマゴソコガネ・チョウセンカブト・クロマダラソテツシジミ及びタイワンツチイナゴをはじめとするバッタ類等である。地中30~40cmまで穴を掘って活動する昆虫はいないため、遺跡の保存に与える影響はないと思われる。

	分類群	目	科	和名	学名
1	哺乳類	食虫目	トガリネズミ科	ワタセジネズミ	<i>Crocidura watasei</i>
2		齧歯目	ネズミ科	クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>
3		偶蹄目	イノシシ科	リュウキュウイノシシ	<i>Sus scrofa riukiuanus</i>
4		食肉目	ネコ科	イエネコ	<i>Felis catus</i>
5	鳥類	カモ目	カモ科	ヒシクイ	<i>Anser fabalis</i>
6		ハト目	ハト科	カラスハト	<i>Columba janthina</i>
7		ハト目	ハト科	リュウキュウキジハト	<i>Streptopelia orientalis stimpsoni</i>
8		ハト目	ハト科	ズアカアオハト	<i>Treron formosae</i>
9		ペリカン目	サギ科	リュウキュウヨシゴイ	<i>Ixobrychus cinnamomeus</i>
10		ペリカン目	サギ科	ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>
11		ペリカン目	サギ科	ササゴイ	<i>Butorides striata</i>
12		ペリカン目	サギ科	アマサギ	<i>Bubulcus ibis</i>
13		ペリカン目	サギ科	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>
14		ペリカン目	サギ科	ダイサギ	<i>Ardea alba</i>
15		ペリカン目	サギ科	チュウサギ	<i>Egretta inetermedia</i>
16		ペリカン目	サギ科	コサギ	<i>Egretta garzetta</i>
17		ツル目	クイナ科	シロハラクイナ	<i>Amaurornis phoenicurus</i>
18		ツル目	クイナ科	リュウキュウヒクイナ	<i>Porzana pusilla</i>
19		ツル目	クイナ科	バン	<i>Gallinula chloropus</i>
20		ツル目	クイナ科	オオバン	<i>Fulica atra</i>
21		ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>
22		チドリ目	チドリ科	ムナグロ	<i>Pluvialis fulva</i>
23		チドリ目	シギ科	アマミヤマシギ	<i>Scolopax mira</i>
24		チドリ目	シギ科	タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>
25		チドリ目	ミフズラ科	ミフズラ	<i>Turnix suscitator</i>
26		タカ目	タカ科	サシバ	<i>Butastur indicus</i>
27		フクロウ目	フクロウ科	リュウキュウコノハズク	<i>Otus elegans</i>
28		フクロウ目	フクロウ科	リュウキュウアオバズク	<i>Ninox scutulata tootogo</i>
29		ブッポウソウ目	カワセミ科	リュウキュウアカショウビン	<i>Halcyon coromanda bangsi</i>
30		ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>
31		キツツキ目	キツツキ科	アマミコゲラ	<i>Dendrocopos kizuki amamii</i>
32		キツツキ目	キツツキ科	オーstonオオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos owstoni</i>
33		ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>
34		スズメ目	サンショウクイ科	リュウキュウサンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus tegimae</i>
35		スズメ目	カラス科	ルリカケス	<i>Garrulus lidthi</i>
36		スズメ目	シジュウカラ科	アマミヤマガラ	<i>Poecile varius amamii</i>
37		スズメ目	シジュウカラ科	アマミシジュウカラ	<i>Parus minor amamiensis</i>
38		スズメ目	ツバメ科	リュウキュウツバメ	<i>Hirundo tahitica</i>
39		スズメ目	ヒヨドリ科	アマミヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis ogawae</i>
40		スズメ目	ウグイス科	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>
41		スズメ目	メジロ科	リュウキュウメジロ	<i>Zosterops japonicus loochooensis</i>
42		スズメ目	ヨシキリ科	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>
43		スズメ目	セッカ科	セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>
44		スズメ目	ヒタキ科	シロハラ	<i>Turdus pallodus</i>
45		スズメ目	ヒタキ科	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>
46		スズメ目	ヒタキ科	アカヒゲ	<i>Luscinia komadori</i>
47		スズメ目	ヒタキ科	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>
48		スズメ目	ヒタキ科	イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>
49		スズメ目	スズメ科	スズメ	<i>Passer montanus</i>
50		スズメ目	セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>
51		スズメ目	セキレイ科	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>
52		スズメ目	ホオジロ科	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>
53	両生類	サンショウウオ目	イモリ科	シリケンイモリ	<i>Echinotriton andersoni</i>
54		無尾目	アマガエル科	ハロウエルアマガエル	<i>Hyla hallowellii</i>
55		無尾目	ヌマガエル科	ヌマガエル	<i>Fejervarya kawamurai</i>
56		無尾目	アオガエル科	アマミアオガエル	<i>Rhacophorus viridis amamiensis</i>
57		無尾目	アオガエル科	リュウキュウカジカガエル	<i>Buergeria japonica</i>
58	無尾目	ヒメアマガエル科	ヒメアマガエル	<i>Mycrohyala okinavensis</i>	
59	爬虫類	有鱗目	ヤモリ科	ホオグロヤモリ	
60		有鱗目	ヤモリ科	タシロヤモリ	<i>Hemidactylus bowringii</i>
61		有鱗目	ヤモリ科	ミナミヤモリ	<i>Gekko hokouensis</i>
62		有鱗目	アガマ科	オキナワキノボリトカゲ	<i>Japalura polygonata polygonata</i>
63		有鱗目	トカゲ科	オオシマトカゲ	<i>Plestidon oshimensis</i>
65		有鱗目	トカゲ科	(ヘリグロヒメトカゲ)	<i>Ateuchosaurus pellopleurus</i>
66		有鱗目	カナヘビ科	(アオカナヘビ)	<i>Takydromus smaragdinus</i>
67		ヘビ垂目	メクラヘビ科	ブラーミニメクラヘビ	<i>Indotyphlops braminus</i>
68		ヘビ垂目	セダカヘビ科	アマミタチホヘビ	<i>Achalinus wernerii</i>
69		ヘビ垂目	ナミヘビ科	リュウキュウアオヘビ	<i>Cyclophiops semicarinatus</i>
70		ヘビ垂目	ナミヘビ科	ガラスヒバア	<i>Hebius pryeri</i>
71		ヘビ垂目	ナミヘビ科	アカマタ	<i>Dinodon semicarinatum</i>
72		ヘビ垂目	コブラ科	ヒヤン	<i>Sinomicrurus japonicus</i>
73		ヘビ垂目	クサリヘビ科	ハブ	<i>Protobothrops flavoviridis</i>
74		ヘビ垂目	クサリヘビ科	ヒメハブ	<i>Oviphis okinavensis</i>

表 11 砂丘地における動物一覧

## (5) ヤコウガイ (夜光貝)

小湊フワガネク遺跡を特徴づける出土遺物として「夜光貝匙」があり、その材料となる大型巻貝の「ヤコウガイ」が大量出土している。このヤコウガイについて、出土遺物の理解の一助として、基本情報を確認しておく。

ヤコウガイ (*Turbo [Lunatica] marmoratus*) は、リュウテンサザエ科に属する大型巻貝である。殻径・殻高は 20cm 以上に成長するものもあり、重量は 2kg を超過する。殻表は暗緑色を呈し、赤茶色の斑紋を有している。貝殻は分厚く真珠層から成るため、その内面は美しい光沢がある。

生息域は、インド洋・太平洋の熱帯域から亜熱帯域に限られている。日本では、種子島・屋久島以南の南西諸島全域に生息が認められる。南西諸島は、黒潮に縁どられた「亜熱帯還流」の内側に大半が位置しているため、高緯度にもかかわらず、ヤコウガイの生息に適した環境条件を備えている。さらに高緯度の種子島・屋久島等の大隅諸島は、「亜熱帯還流」の外側に位置しているため、海水温が下がり、ヤコウガイの生息域の北限に当たる。

藻食性であるため、岩礁等が発達した浅海に生息している。サンゴ礁の礁縁に形成されている礁斜面に好んで生息する (図 31)。

貝殻の中身 (軟体部) は、先史時代以来、食用にされてきたが、奄美群島や沖縄諸島では、近世期に軟体部の塩漬が上納品として扱われていた。現在も、食用にされているが、日常的に食べられている食材ではない。

ヤコウガイの利用は、貝殻の利用に特徴づけられる。真珠質の貝殻を持つヤコウガイは、古来より螺鈿・蒔絵等の美術工芸材料として用いられてきた。産業的多産地域として、フィリピン諸島 (フィリピン)、アンダマン・ニコバル諸島 (インド)、奄美群島・琉球諸島 (日本) が知られている。

その利用は、古くは古墳時代にさかのぼり、三国時代の朝鮮半島で、伽耶や新羅の王墓に夜光貝匙が副葬されていて (5 世紀後半頃)、同じ頃、日本でも南西諸島の種子島・広田遺跡 (南種子町) から、夜光貝匙が墓壙に副葬されている事例が確認されている。6~7 世紀以降、奄美・沖縄地域でも夜光貝匙の製作が盛行するようになるが、平安時代には減少していくようである。

一方、本土地域では、平安時代に「唐物」をはじめとする威信財が珍重されるようになり、列島周縁地域からもたらされる北方物産・南方物産も非常に好まれた。特にヤコウガイは、9 世紀後半頃から「ヤクガイ」の名称でたびたび史料に現われるようになり、宮廷貴族から希求の品として認識されていた。

『枕草子』には、「公卿、殿上人、かはりがはり盃とりて、はてには屋久貝という物して飲みてたつ」と酒杯として使われた記載がある。ヤコウガイ製酒杯を意味する「螺杯」の用語が他の史料にも散見されるので、ヤコウガイ製酒杯は宮廷貴族層の間で珍重されていた様子がうかがわれる。

また藤原実資による『小右記』には、大隅国の藤原良孝から「赤木二切、檳榔三百把、夜久貝五十口」等が届けられたと記載があり、貝殻が贈答品として使われていた様子もわかる。『宇津保物

語』には、「白きところには、白きものには屋久貝をつきまぜて塗りたれば、きらきらとす」と記載されているので、貝殻が螺鈿以外にも工芸材料として使われていた事実が確認できる。

さらに、ヤコウガイは、平安時代以降における国産螺鈿の発達に伴い、螺鈿材料としても、貝殻の需要が増大を続けた。日本列島における亜熱帯の最北限に当たる奄美群島北部が、ヤコウガイの産出地として機能していたと考えられている。

夜光貝の地域呼称について、奄美群島では「ヤクゲー」「ヤッコゲ」等と呼ばれていて、ヤコウガイの古称が保有されているとも考えられる。

奄美群島が米軍占領統治下から日本復帰を果たすと、ヤコウガイ貝殻は、高度経済成長期の日本社会において、ワイシャツやブラウス等のボタン材料としても大きな需要があり、ヤコウガイの乱獲が行われ、生息数がかなり減少したと言われている。

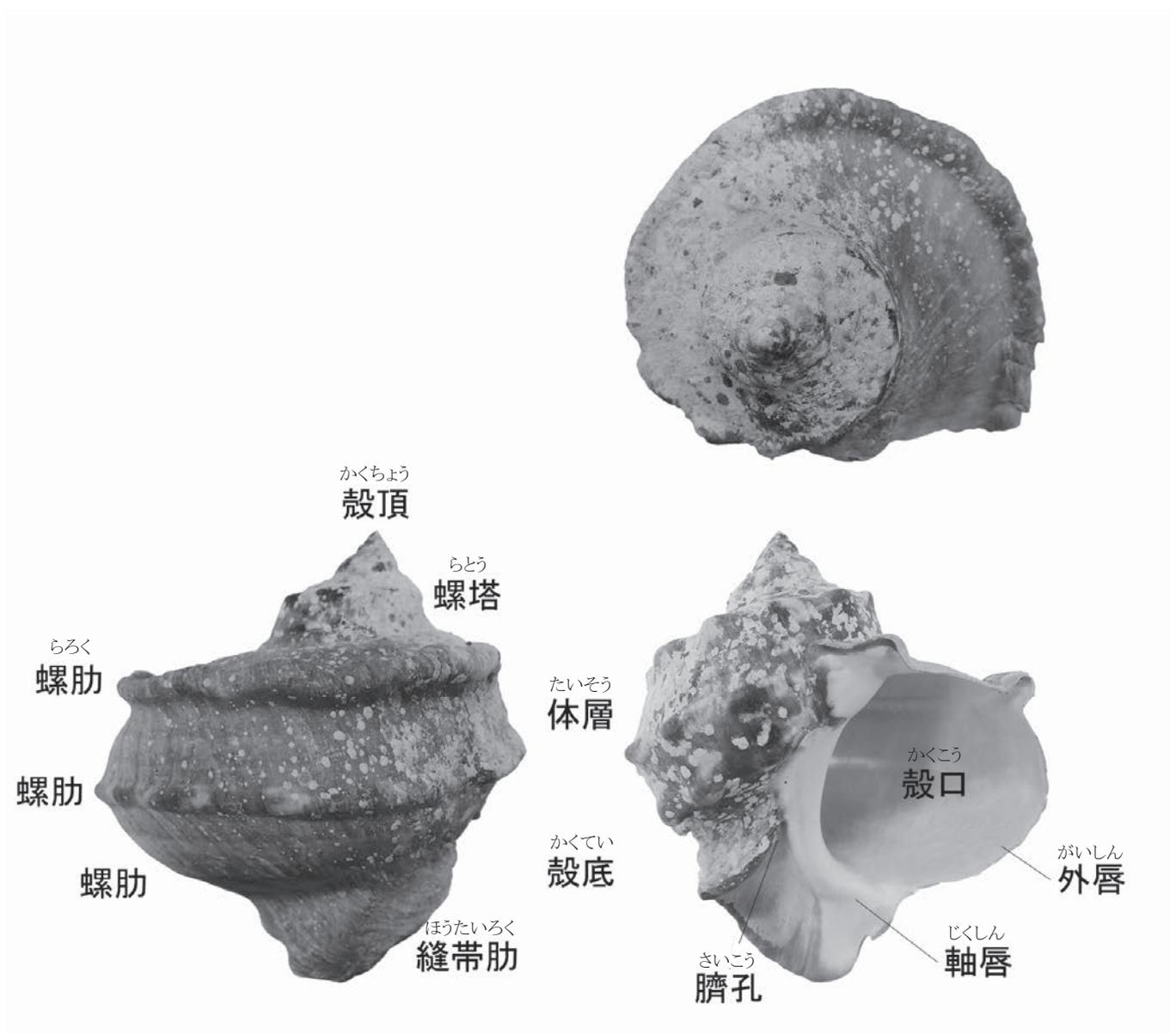


図 20 ヤコウガイの部位名称

### 3 歴史的環境

#### (1) 時代区分

奄美群島は、北海道・沖縄県と同様に、いわゆる教科書的日本史とは異なる歴史を歩んだ地域である。その時代区分は複雑で、歴史学界で共通認識された時代区分が未だ存在しない。特に先史時代から琉球国統治時代に至るまでの考古学的時代区分は、沖縄考古学における時代区分がしばしば適用されているが、奄美群島における考古学的成果は沖縄諸島と必ずしも同一の様相を示しているわけではない。

本書では、奄美市立奄美博物館で用いられている時代区分に従い、説明を進めていく（表 12）。

#### (2) 先史

##### ①旧石器時代

旧石器時代は、約 3 万年前に噴火・降灰きしかわした始良 Tn 火山灰の堆積層が、喜子川遺跡ぞう（奄美市笠利町）、ガラ竿遺跡（伊仙町）等で確認されている。その下層から遺跡が確認されているので、既に旧石器時代には奄美群島で人類活動が開始されていた事実が解る。

##### ②縄文時代

縄文時代は、沖縄島まで広義の縄文文化圏に含まれるが、先島諸島では縄文文化とは異なる南方的文化が営まれていた。奄美群島における縄文時代開始期の様相は、長らく約 6,000 年～7,000 年前の前期段階までしか確認できず、判然としない状態が続いていた。最近、徳之島の下原洞穴遺跡したばらどうけつ（天城町）から約 13,000～14,000 年前に位置づけられる隆帯文土器りゅうたいもんが発見され、草創期にさかのぼることが明らかとなった。約 10,000 年前に氷河期（最終氷期）が終わると気候は温暖化しはじめ、それに伴い海水面の上昇が続いた。約 7,000 年前にはピークに到達し、「縄文海進」と呼ばれている。その時に、現在の海岸線よりも離れた後方に海岸砂丘（古砂丘）が形成され、縄文時代前

日本歴史	歴史区分	奄美の時代区分	〔名瀬市誌〕時代区分	沖縄の時代区分
旧石器時代	先史	旧石器時代	奄美世	旧石器時代
縄文時代		縄文時代		貝塚時代前期
弥生時代		弥生時代並行期		貝塚時代後期
古墳時代		古墳時代並行期		
奈良時代 平安時代		古代並行期		
鎌倉時代	中世	中世	アジ世	グスク時代
室町時代 安土桃山時代		琉球国統治時代	那覇世	琉球王国時代
江戸時代		近世	薩摩藩統治時代	
明治時代 大正時代	近代	明治時代 大正時代		明治時代 大正時代
昭和時代		昭和時代		
	米軍占領統治時代	アメリカ世	米軍占領統治時代	
	昭和時代			昭和時代
平成時代 令和時代	現代	平成時代 令和時代		平成時代 令和時代

表 12 奄美群島の時代区分



図 21 旧石器時代の礫群（喜子川遺跡）

期～晩期頃の遺跡が分布している。

約 3,000 年前には定住的な集落の形成が活発化しはじめ、縄文時代晩期後半から終末にかけて、ハンタ遺跡（喜界町）、宇宿貝塚（奄美市笠利町）、宇宿小学校遺跡（奄美市笠利町）、城サモト遺跡（奄美市住用町）、塔原遺跡（天城町）、住吉貝塚（知名町）、上城遺跡（与論町）等、集落遺跡が奄美群島全域から確認されている。大型石皿や磨製石斧、骨角器や貝製品等が発達した奄美群島独特の縄文文化が繁栄した。



図 22 縄文時代の石組竪穴住居跡（宇宿貝塚）

小湊フワガネク遺跡が所在する砂丘から後方にある古砂丘上から、この縄文時代後期・晩期と考えられる小湊ナンガネク遺跡が確認されている。

### ③弥生時代並行期

日本歴史で農耕社会が形成されていく弥生時代は、南西諸島では種子島・屋久島まで稲作農耕を基本とする弥生文化の影響が強いが、トカラ列島以南の島嶼地域では稲作農耕文化が定着せず、縄文時代から引き続き漁撈採集社会が営まれていた。しかし、九州地方における政治的社会的有力階層は、ゴホウラ・イモガイ等の貝製装身具を使用しており、その材料となる南海産大型貝類は、奄美群島以南の島嶼地域と遠隔地交易を行い入手していた。奄美・沖縄地域と九州地方の間では、貝交易が行われていて、社会的交流が続いていたのである。

約 3,000 年前から 1,000 年程度、気候が寒冷化したと考えられており、それに伴い海水面の低下が確認されている（弥生の小海退）。この時に形成されはじめた海岸砂丘が現在の海岸線に発達している砂丘（新砂丘）であり、弥生時代以降の貝塚遺跡が多数分布している。

### ④古墳時代～古代並行期

弥生時代における農耕社会の形成は政治的社会的発展へ繋がり、続く古墳時代には近畿地方に大和政権が誕生し、全国に古墳文化が波及した。前方後円墳をはじめとする古墳は南九州（主に大隅半島）まで造られたが、南西諸島には、古墳は分布しない。弥生時代に引き続き、ゴホウラ・イモガイ等の貝製装身具が使用されていて、その材料となる南海産大型貝類の遠隔地交易が、奄美群島以南の島嶼地域と行われていた。

これまでの小湊フワガネク遺跡の発掘調査成果から、遺跡の主体となる古墳時代終末期の 6～7 世紀の文化層の下層に 4～5 世紀頃の古墳時代並行期の文化層があり、遺跡が営まれた中心的時期は古墳時代並行期であることが明らかにされた。また、さらに下層には 2～3 世紀頃の弥生時代並行期の文化層が確認されている。



図 23 土盛マツノト遺跡のヤコウガイ貝殻集積

現在のところ、奄美群島の古墳時代並行期は、弥生時代並行期に引き続き、漁撈採集社会が営まれていたと考えられている。いわゆる貝塚遺跡がほとんどを占めていて、建物跡等の遺構の確認事例は少なく、暮らしの様子はよくわからない状況が続いていた。これに対し、小湊フワガネク遺跡の発見及び発掘調査

により、この時代の遺構・遺物がまとまりのある状態で確認され、当時の生業活動や食料等、暮らしの様子を知るための情報が多数得られたのである。

『日本書紀』、『続日本紀』には、7～8 世紀にかけて、律令国家による地方統治政策が薩南諸島を中心とする南島地域まで展開されていた様子が記載されている。日本の文献における奄美群島や琉球諸島の初出となる。

また太宰府跡（福岡県）から、「奄美嶋」（奄美大島）「伊藍嶋」（沖永良部島か）の島名が記載された 8 世紀前半（奈良時代）の木簡も発見されていて、文献史料の記載を裏付けるものとも考えられている。

しかし、考古学側では奄美群島・琉球諸島で平安時代まで貝塚遺跡が営まれていたことから、社会の代表を中央政府に派遣するような政治的社会は形成されていないと理解されてきた。近年、奄美大島では、小湊フワガネク遺跡や土盛マツノト遺跡（奄美市笠利町）のように、生業活動の中心は漁撈採集であるものの、鉄器も所有し、ヤコウガイの殻を集積させ、貝製品の集中的生産をしていた「ヤコウガイ大量出土遺跡」が確認され（図 23）、この時代の島嶼社会が漁撈採集社会に止まらなかった可能性が、再検討される契機となった。

### （3）中世

日宋貿易の開始以降、九州南方海域を指すと考えられる「キカイガシマ」の名称が、史料に現れるようになる。同時期の 11 世紀代に、奄美群島では、農耕が開始されるようになり、九州の土師器・須恵器・滑石製石鍋・焼塩壺等、高麗の無釉陶器・青磁、宋の白磁・越州窯・青磁等の搬入遺物が多数出土し、大規模な掘立柱建物群が形成された国史跡・城久遺跡（喜界町）、高麗無釉陶器に技術的系譜を持つ陶器の生産が行われた国史跡・徳之島カムイヤキ陶器窯跡（伊仙町）等が確認されている。奄美群島に出現したこれらの遺跡の中世的容器組成は、琉球諸島にも波及して、いわ

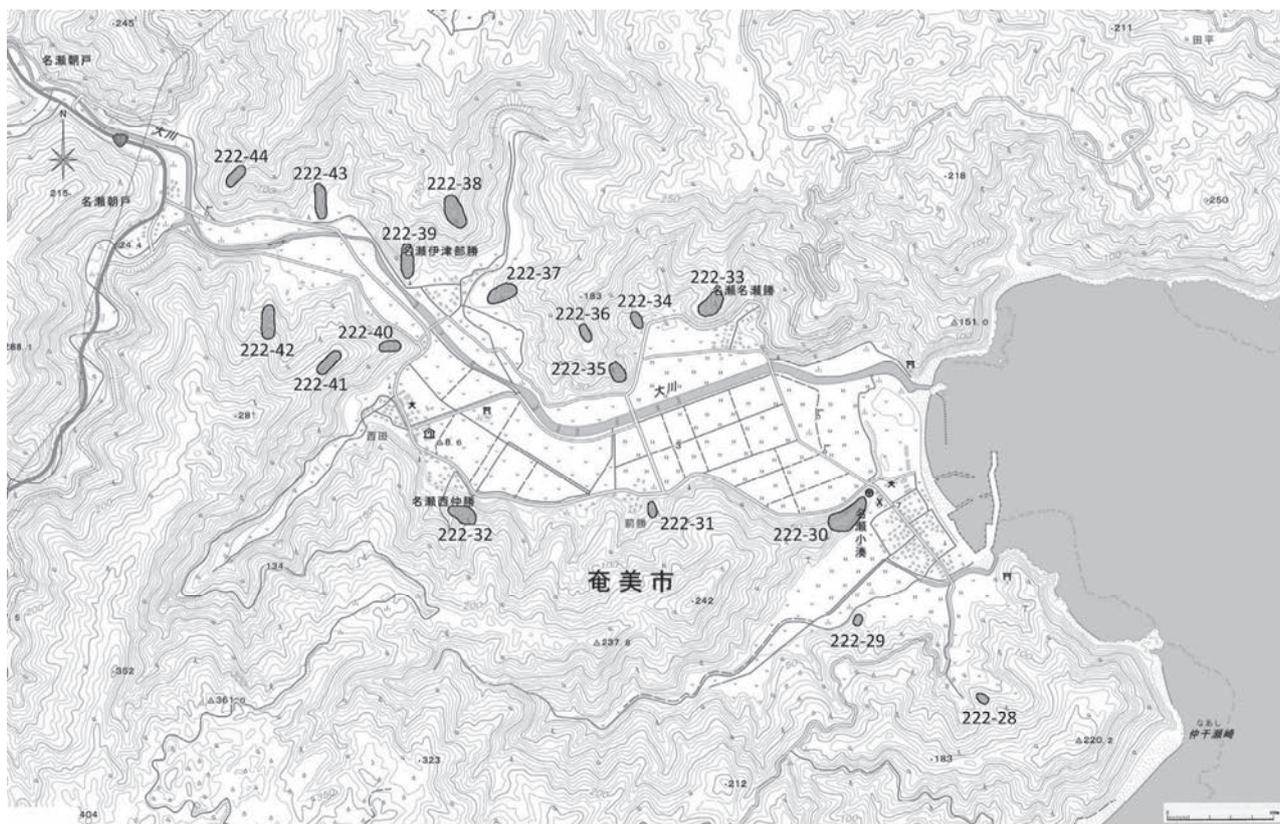


図 24 古見方地区における城郭遺跡の分布（番号は鹿児島県遺跡地図による）

ゆる「グスク時代」開始の契機となるのである。小湊フワガネク遺跡の上層から確認されている文化層は、当該時期に当たるものである。

中国が、宋、元、明と大国の興隆と滅亡を繰り返す激動の時代を迎えていた時期、13世紀末頃から沖縄島には世界文化遺産登録されている大型城塞型グスク群が出現しはじめる。奄美群島では、国史跡・赤木名城跡をはじめとする本土地域の中世山城型の城郭遺跡が奄美大島を中心に構築されるようになり、小湊フワガネク遺跡が所在する古見方地区にも多数分布している（図 24）。

大型城塞型グスク群が出現した沖縄島では、山北・中山・山南の三按司が勢力を広げ、明に朝貢しはじめると、その直後の 1429 年、「琉球国」が誕生するのである。

#### （4）琉球国統治時代以降

##### ①琉球国統治時代

奄美群島は、15 世紀中葉頃から 17 世紀初頭まで、琉球国の統治下に置かれていた。琉球国の地方行政制度である「間切」が施行され、奄美大島は 7 間切（笠利間切・古見間切・名瀬間切・住よう間切・屋喜内間切・東間切・西間切）に区分された。琉球国の奄美大島統治の拠点、笠利集落（奄美市笠利町笠利）に置かれていたと考えられている。

##### ②薩摩藩統治時代

薩摩藩による慶長 14 年（1609）の軍事侵攻の結果、奄美群島は、琉球国の統治下から事実上分離され、薩摩藩の直轄地域として支配されるようになる。琉球国が施行した間切制度は引き継がれ、

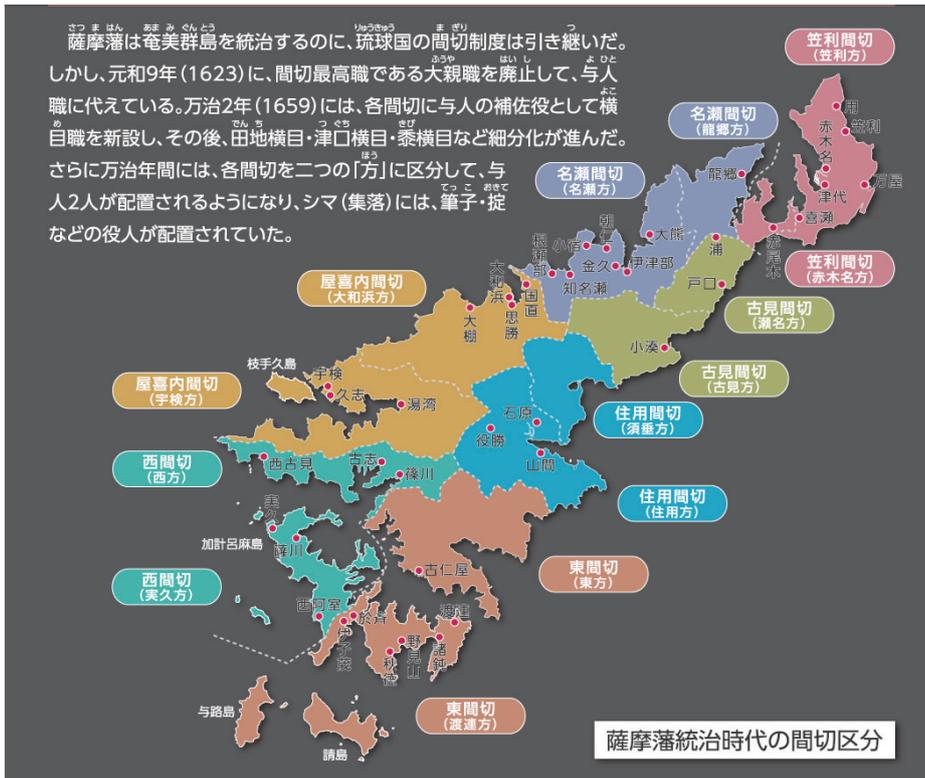


図 25 薩摩藩統治時代の間切区分

元禄年間(1688年~1703年)には、笠利間切(赤木名方・笠利方)、古見間切(古見方・瀬名方)、名瀬間切(龍郷方・名瀬方)、住用間切(住用方・須垂方)、屋喜内間切(大和浜方・宇検方)、東間切(東方・渡連方)、西間切(西方・実久方)の7間切14方で構成されていた。

現在の奄美市名瀬は、薩摩藩統治時代における名瀬間切及び古見間切の一部から構成されている。

名瀬間切は、名瀬方(金久・伊津部・大熊・浦上・有屋・仲勝・朝仁・小宿・知名瀬・根瀬部の10集落)と龍郷方(有良・芦花部・秋名・幾里・嘉渡・円・龍郷・久場の8集落)に区分されており、古見間切も、古見方(小湊・名瀬勝・西仲勝・伊津部勝・朝戸の5集落)と瀬名方(中勝・奥間(廃村)・古里(廃村)・戸口・大勝・浦の6集落)に区分されていた。

また奄美市笠利町・住用町は、薩摩藩統治時代における笠利間切・住用間切の行政区域をおおむね踏襲している歴史的地域である。

### ③近代

享和1年(1801)に、薩摩藩の仮屋が名瀬の伊津部に移転されると、官公庁の変遷に伴いながら寄留商人を中心に名瀬の街の形成が始まる。明治政府による明治4年(1871)の廃藩置県後、薩摩藩は「鹿児島県」となり、明治8年(1875)に名瀬の伊津部仮屋が廃止され、新たに「大島大支庁」が名瀬金久村に設置されるのである。それ以後、昭和時代になるまで鹿児島県の島嶼地域をめぐる行政管轄区域の編成は何度も繰り返され、複雑に変遷した。

明治12年(1879)には郡区町村編制法の施行に伴い、奄美群島は大島郡として鹿児島県大隅国に編入され、大島郡役所が名瀬金久村に設置された。旧来の間切制度を踏襲する形で、間切の下部に置かれた「方」は、小区として移行した。小区には戸長が置かれることになり、与人が戸長に任命されている。

古見方役場は小湊集落に所在していて、最初の役場所在地は小字「上間」であると伝えられてい



図 26 米軍占領統治下の南西諸島の日本返還過程

る。その後、小湊簡易科小学校跡に移転して、さらに明治時代末期に現在の奄美市立小湊小学校前の場所に移転した。

明治 41 年（1908）、島嶼町村制が施行され、トカラ列島は十島村に、奄美大島は笠利村・龍郷村・名瀬村・住用村・大和村・焼内村・東方村・鎮西村の 8 箇村が成立した。名瀬村は、名瀬間切の名瀬方 10 集落、龍郷方 2 集落、古見間切の古見方 5 集落が併合されて

成立したので、古見方役場は廃止されている。大正 9 年（1920）に島嶼町村制が廃止され、町村制が施行されると、大正 11 年（1922）には、名瀬村から金久と伊津部の 2 集落だけが分立して名瀬町となり、名瀬村における他集落は三方村となる。

#### ④米軍占領統治時代～現代

日本敗戦により、昭和 21 年（1946）に南西諸島の北緯 30 度以南の島嶼は、アメリカ占領軍沖縄海軍軍政府の行政統治下に入る。同年、名瀬町は市制を施行して名瀬市となり、北部南西諸島軍政府が開設される。

昭和 27 年（1952）2 月 10 日、北緯 29 度以北のトカラ列島が日本に復帰した。昭和 26 年（1951）、奄美大島日本復帰協議会の発足を契機に、奄美群島全域で日本復帰に向けた住民運動が展開されはじめ、昭和 28 年（1953）12 月 25 日に日本復帰を果し、ふたたび鹿児島県となった。

北緯 27 度以南の琉球諸島（沖縄諸島・先島諸島）が日本に復帰したのは、奄美群島の日本復帰から 19 年後の昭和 47 年（1972）5 月 15 日である。

日本復帰後の昭和 30 年（1955）、名瀬市は三方村と再び合併して名瀬市となる。その後、平成 18 年（2006）、笠利町・名瀬市・住用村の 3 市町村が合併、「奄美市」が誕生して今日に至る。

平成 15 年（2003）、奄美群島は日本復帰 50 周年の節目を迎え、平成 25 年（2013）に日本復帰 60 周年、平成 30 年（2018）に日本復帰 65 周年の記念行事が行われている。

#### （5）古地図にみる小湊

幕末、アジアに進出してきた欧米諸国に対して、江戸幕府は、天保 13 年（1842）及び嘉永 2 年（1849）に「海岸防備」の強化を図る施策を打ち出し、全国諸藩に海岸絵図の作成を命じている。



図 27 「大島古図」(鹿児島県立図書館所蔵)における古見間切古見方



図 28 大正 9 年測量「奄美大島 5 万分の 1 地形図」

奄美大島においても、嘉永4年（1851）、「英夷」からの防衛を図るために海岸防備の作成が進められた。薩摩藩の上級藩士・名越左源太が奄美大島に遠島されていた嘉永5年（1852）<sup>かわみなみ</sup>、琉球国の勤務経験もある沓陽次郎右衛門が率いる一行が作成した奄美大島の精密な地図が「大島古図」と呼ばれる海岸防備図である（図27）。

小湊集落の古老たちによれば、西田集落あたりはかつて「シタラガチ」と呼ばれていたという。この「大島古図」の古見間切古見方の部分には、現在の西田集落と思われる場所に「須垂勝村」という記載を確認することができる。伝承されている「シタラガチ」とは、この「須垂勝村」に該当するものではないかと考えられる。大川は、大きく蛇行して現在の流路とは異なり、河口部分の右岸にはソテツと思われる植物が二列描かれていて、新砂丘・古砂丘の砂丘列が表現されている。

それから大正9年（1920）に、国土地理院の前身機関である「陸軍参謀本部陸地測量部」が奄美大島の地形図を作成している。これによると、大川は、「大島古図」の記載に近い蛇行した流路であり、大川右岸に新砂丘・古砂丘の砂丘列が表現されている。

## 4 文化・経済

### (1) 交通・交流

#### ① 史跡に至る交通アクセス

奄美大島内における交通手段は、陸路の移動にほぼ限られている。島内における道路網は、奄美大島を南北に縦断する一般国道 58 号を基軸として、それに連結する主要地方道が幹線道路となり、これらを補完する一般県道等が生活道路として整備されている。

島内交通は、公共交通機関として、「株式会社しまバス」のバス路線が 49 系統（平成 30 年 3 月 31 日現在）、「南部交通株式会社」のバス路線が 7 系統（平成 30 年 3 月 31 日現在）運行している。タクシーは、奄美大島の車両総数が 197 両を数え、奄美市の車両数は 183 両で、全体の約 93% を占めている（平成 30 年 3 月 31 日現在）。そのほかレンタカーは、事業者数が 84 業者、111 営業所であるが、奄美市の事業者数は 30 業者、39 営業所で、全体の約 35% を占めている（平成 30 年 3 月 31 日現在）。

奄美市名瀬の市街地から史跡が所在する小湊集落まで、バス・自家用車等の自動車による所要時間は 40 分程度である。一般国道 58 号を南方向に向かい、朝戸トンネル（延長 1,725m）を越え、朝戸集落から左折して一般県道小湊朝戸線に入り、直進すると「奄美市立大川小中学校」があり、

#### 奄美空港から小湊フワガネク遺跡までのアクセス

##### ■自動車を利用する場合

- ・奄美空港から名瀬市街地まで（約50分）
- ・名瀬市街地から小湊フワガネク遺跡まで（約30分）

##### ■路線バスをご利用の場合

- ・「奄美空港」乗車「ウエストコート前」下車（乗換え）（約50分）
- ・「ウエストコート前」乗車「朝戸入口」下車（乗換え）
- ・「朝戸入口」乗車「奄美看護学校」下車（約40分）

#### 名瀬港から小湊フワガネク遺跡までのアクセス

##### ■自動車を利用する場合

- ・名瀬港から名瀬市街地まで（約5分）
- ・名瀬市街地から小湊フワガネク遺跡まで（約30分）

##### ■路線バスをご利用の場合

- ・「名瀬新港」乗車「ウエストコート前」下車（乗換え）（約5分）
- ・「ウエストコート前」乗車「朝戸入口」下車（乗換え）
- ・「朝戸入口」乗車「奄美看護学校」下車（約40分）



図 29 小湊フワガネク遺跡の交通アクセス

そのまま直進していくと、小湊フワガネク遺跡の説明板が設置された十字路に行き当たる。

この十字路は、直進すれば「奄美看護福祉専門学校」に到着し、学校の所在する砂丘一帯に小湊フワガネク遺跡が広がる。十字路を右折すれば、「奄美市立小湊小学校」があり、小湊集落に入る。左折すれば、大川を渡り、名瀬勝集落に入る。

## ②小湊集落の陸上交通

奄美大島における道路網の整備は、明治41年（1908）、「島嶼町村制」が施行され名瀬村（旧名瀬市の前身）が誕生した頃から開始される。主要な幹線道路は、①名瀬古仁屋線（現在の一般国道58号）、②名瀬早町線（現在の一般県道小湊朝戸線）、③名瀬笠利線（現在の一般国道58号）、④名瀬湯湾線（現在の一般県道名瀬瀬戸内線）の4路線である。

名瀬早町線は、喜界島出身の鹿児島県議会議員の砂泊兼照が、喜界島の早町村まで県道を繋ぐために整備したもので、かつて小湊集落では「砂泊道」と呼ばれていたという（注1）。この名瀬早町線の開通で、牛馬の荷車による運搬が行われるようになり、小湊集落から野菜や魚が名瀬の街の市場に運び出されたのである。また徒歩で名瀬に行く場合には、伊津部勝集落から朝戸峠を越える古道もよく利用されていた。

## ③小湊集落の海上交通

明治時代から昭和30年代まで、小湊集落を起点として、湾港・早町港まで、「喜界丸」等の定期船が就航していた。明治9年（1876）に開設された小湊郵便局は、明治33年（1900）から大正14年（1925）まで喜界島の郵便物を取り扱い、水路便が往来していたこともある。

また林業が最盛期を迎えていた戦前までは住用地区とも交流が深く、小湊集落から「早栄丸」、「政助丸」の帆船が、山間集落や市集落まで日用品や食料を運搬していたという（注2）。

## （2）生業活動

### ①農業

小湊フワガネク遺跡が所在するフワガネク（外金久）・ナガガネク（長金久）・サガリガネク（下金久）の一帯は、畑地として利用されている。砂丘地におけるいわゆる砂地農業が伝統的に行われていて、独特の農業景観を醸成している。栽培されているのは、砂地農業に特徴的なネギ・ダイコン・ラッキョウ・サツマイモのほか、サトイモ・ジャガイモ・キャベツ・ハクサイ・ニンジン・ニラ・ゴボウ・エダマメ・ラディッシュ・スナップエンドウ等で、自家用野菜類が中心である。

砂地土壌のため、①粘土含有量が著しく少ない、②土壌粒子（砂粒）が結合しにくく土壌の空隙率（砂等の粒子の総体積における隙間部分の比率）が高い、③通気性・透水性に富んでいて保水性に欠けている、④有機物が集積されにくく保肥性に欠けている、⑤地温が上昇しやすい、⑥地表面の砂が乾燥して風により移動する「飛砂」が起きやすい等の特徴がある。

③の保水性は、現在はスプリンクラーが全域に設置されているため、栽培環境は飛躍的に改善されているが、もともと③⑤は、植え付け・収穫時期の季節的選択により対応してきた。④の保肥性

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
夏野菜												
冬野菜												

植付時期
  収穫時期

夏野菜・・・キュウリ, カボチャ, ニガウリ, ヘチマ, トウガン, ナス, ピーマン, オクラ, トマト, ニラ

冬野菜・・・ダイコン, ニンジン, サツマイモ, サトイモ, ジャガイモ, カブ, ラディッシュ, ネギ, ラッキョウ, ニンニク, キャベツ, ブロッコリー, ほうれん草, 小松菜, 水菜, 春菊, ソラマメ, スナップエンドウ, ウコン

表 13 畑地における作物一覧と植付・収穫時期

は、ソテツ葉を燃やした灰（養分吸着剤となる）や海岸に打ち寄せられるホンダワラ等を砂地に混ぜて土壌蓄積養分を高める対応が行われてきた。⑥の飛砂は、細かく区画された畑地の境界に植栽されたソテツが防風林的機能を果たしている。

畑地の農作物は、地温が上昇する7・8・9月（特に8月）を避けながら、年間2回の植え付け・収穫をする栽培方法が行われている。まず降雨が多い3・4月に植え付けを行い、最も地温が上昇する8月前の6・7月に収穫が行われる。7・8・9月は、畑地の除草が中心となる。そして秋の10・11月に植え付けを行い、2・3月に収穫が行われる（表13）。

## ②漁業

明治時代以降、人口が増加を続けた名瀬の街は、奄美群島最大の消費都市となり、自然発生的に市場が形成されていた。その名瀬市場に食料を供給していたのが小湊集落であり、特に漁業が盛んな地域として知られていた。

小湊集落が面している海岸は、前方はサンゴ礁が発達していない砂地の海岸で、集落左右の海岸はサンゴ礁が発達した海岸となる。これらの海岸地形に応じて、伝統的に営まれてきた漁業は多様で、網漁・釣漁・刺突漁・潜水漁・採集漁等がある（表14）。



図 30 ホシレンコ

〔網 漁〕小湊集落では、大正時代末期頃に導入された「ヨットコ」と呼ばれる刺網

種類	呼称	内容	魚場
網漁	ヨットコ	舟で外海に出て、オヨロ（ムロアジの方言呼称）を対象に舟6艘で行う刺網漁。	外海
	サデ網	舟で網を廻らせて海岸から網を引き寄せて魚類を獲る漁。	沿岸
釣漁	ユナガリ	夜、外海で行われる舟釣り漁	外海
	ヒナガリ	昼、外海で行われる舟釣り漁	外海
	ガチンアプリ	夜、外海で行われるガチン（アジの方言呼称）の舟釣り漁	外海
	ウチケ	夜、地磯で行われる釣り漁。	沿岸
	イカビキ	夜、舟で外海に出て、魚の形の疑似餌でイカを釣る漁。	外海
刺突漁	ソラ突き	舟で外海に出て、魚の形の疑似餌でソラ（サワラの方言呼称）を誘き寄せて鉈で突き刺す漁。	外海
潜水漁	シミイソ	サンゴ礁の礁縁で行われる潜水漁。	サンゴ礁
採集漁	アギイソ	昼、サンゴ礁のヒシバナ（礁嶺）を歩いて移動しながら行われる採集漁。	サンゴ礁
	イザリ	夜、サンゴ礁のヒシバナ（礁嶺）を歩いて移動しながら行われる採集漁。	サンゴ礁

表 14 小湊集落における漁撈活動（隣 1993）

漁が行われていた。外海に出て、舟6艘で刺網を設置して、オヨロ（ムロアジの方言呼称）を捕獲していた。最盛期には、小湊集落に4組合、崎原集落に2組合の6組合が存在していたという（注3）。

【釣 漁】奄美大島近海には、大型のレンコダイの一種で、平成27年（2015）に新種認定された「ホシレンコ」という魚が生息している。ホシレンコは、春期から秋期にかけて水深300m前後の深い場所に生息していて、冬期になると産卵期となり（12～2月頃）、水深50～80m程度の浅瀬に移動するので、その場所を狙い釣漁が行われてきた。奄美市名瀬の小湊集落、奄美市住用町の和瀬集落や市集落等では、古くから冬期にテーヌユ（タイ）釣りが行われ、特産品として知られていた。このテーヌユがホシレンコである。

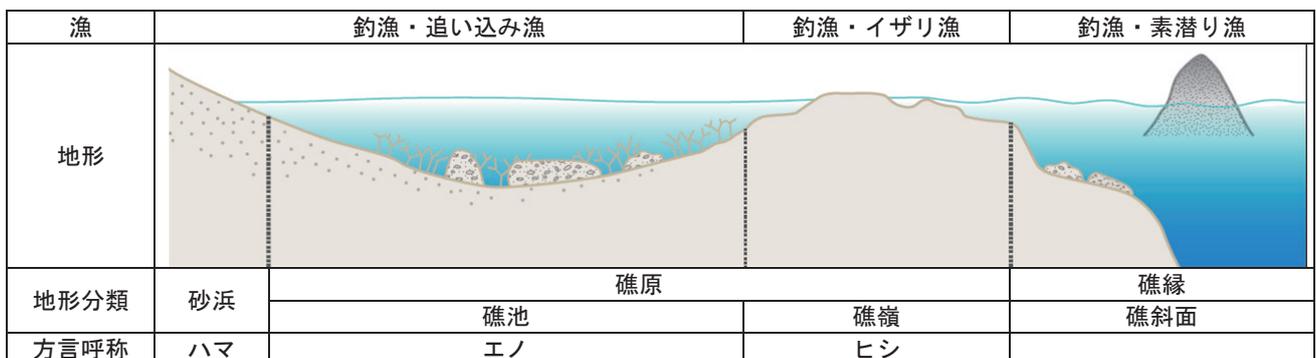


図 31 小湊集落のサンゴ礁地形（断面）

大正10年(1922)に、奄美大島を訪れていた柳田國男の2月7日から3月1日の日記に「鯛をになひ山を越来る人、小湊は鯛のよくとれる所、除夜にたくさんとれしなり」と記されているが(注4)、この鯛はホシレンコであると考えられる。小湊集落では、最盛期のような釣漁はもう行われていないが、現在でも続けられている。

〔刺突漁〕小湊集落や奄美市住用町の市集落では、春期から秋期を中心に、ソラ(カマスサワラ・オキサワラの方言呼称)の突漁が古くから行われている。長さ2m前後の竹竿に1m程度の紐を結び、その先端に魚の形をした疑似餌を付ける。この疑似餌を水面で動かしながらソラを誘い出し、疑似餌に近づいてきたソラをめがけて、もう片方の手に持つ三又のトギヤ(鉗)で突くのである。

〔採集漁〕一日2回ある海の干潮・満潮は、おおむね4月から9月は昼の干潮が大きく引き、10月から3月は夜の干潮が大きく引く。その季節的特徴に応じて、サンゴ礁が発達した海岸では採集型の漁労活動が行われている。

この漁を行うのは、女性や高齢者が中心である。干潮時に潮が引くと、サンゴ礁の礁嶺(ヒシバナ)は陸化するので(数時間)、その礁嶺を歩き魚介類を捕獲しながら移動していく。特に10月から3月は夜の干潮が大きく引くので、照明(かつては松明、現在はガスランプやLED電燈等)を持ちながら行うイザリ漁が現在でも盛んである。主な獲物としては、魚類ではブダイ類・

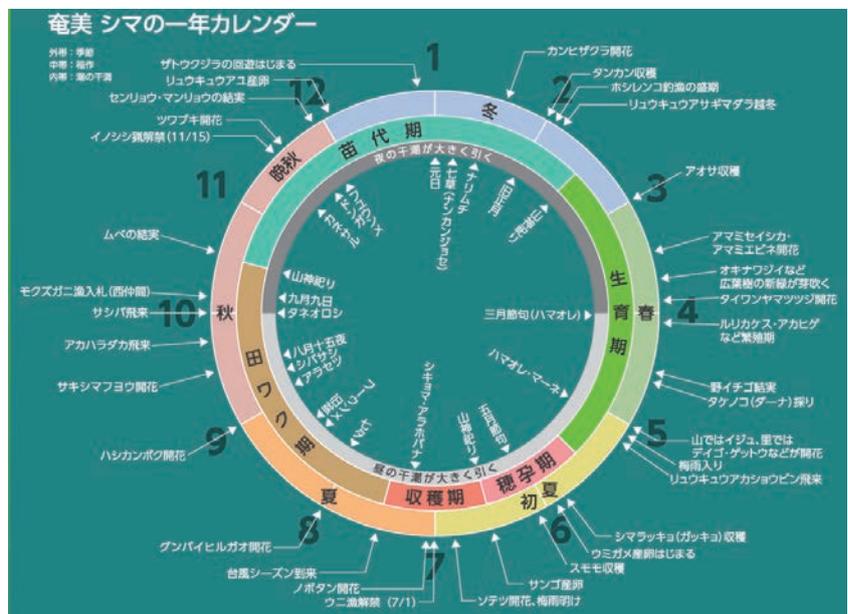


図32 シマの一年カレンダー(奄美市立奄美博物館)

ベラ類、貝類ではヤコウガイ・チョウセンサザエ・タカラガイ類、甲殻類ではオウギガニ類・アカモンガニ等が捕獲、食用にされている。

### (3) 伝統的行事

現在でも旧暦行事が行われている奄美群島の中でも、特に奄美大島は旧暦行事がよく継承されていて、小湊集落にも多くの旧暦行事が残されている。小湊集落の旧暦行事について、隣重俊氏による記録に従いながら(注5)、別表に整理しておく(表15)。

### (4) 観光

小湊集落をはじめとする古見方地区の観光については、まず整備されている施設として、伊津部勝集落に所在する「本場大島紬泥染公園」、小湊集落の海岸側に所在する「小湊漁港公園」、小湊集



落の金子山一带に広がる「金子山青少年の森」等がある。「小湊漁港公園」は、奄美市名瀬における東海岸唯一の海水浴場として市民に親しまれている。近年は、正月の初日の出スポットとしても知られるようになってきた。

イベントとしては、小湊漁港を利用して、毎年開催されている「小湊港祭り」がある。これは、奄美大島の伝統的木造船を模造したグラスファイバー舟による舟漕ぎ競争で、出場チームの順位を競う大会である。毎年45前後の参加チームがあり、応援や見学等、大勢の人びとで賑わう。

そして古見方地区は、その豊かな自然環境から各種の自然観察ポイントとしても利用されている。朝戸集落の大川ダム下流部分に所在する「ビオトープ（野生生物が生息できるように造成された小規模な水辺の空間）」における自然観察や、大川流域や安脚場果樹林道等を利用して「バードウォッチング」が行われ、野鳥観察が楽しまれている。

また、毎年1～3月頃にシベリア方面から南下してきて、奄美大島近海を周遊するザトウクジラの群れを観察する「ホエールウォッチング」が、小湊漁港から出港して行われていて、クジラの群れと一緒に遊泳できる「ホエールスイム」が可能な日本有数の場所として知られている。

そのほか奄美市が地域活性化事業として取り組みを進めている「一集落1ブランド事業」において、小湊集落から「小湊フワガネク遺跡とソテツ畑」と「小湊巖島神社と金子山青少年の森」が選定されていて、いずれも景勝地として知られている。

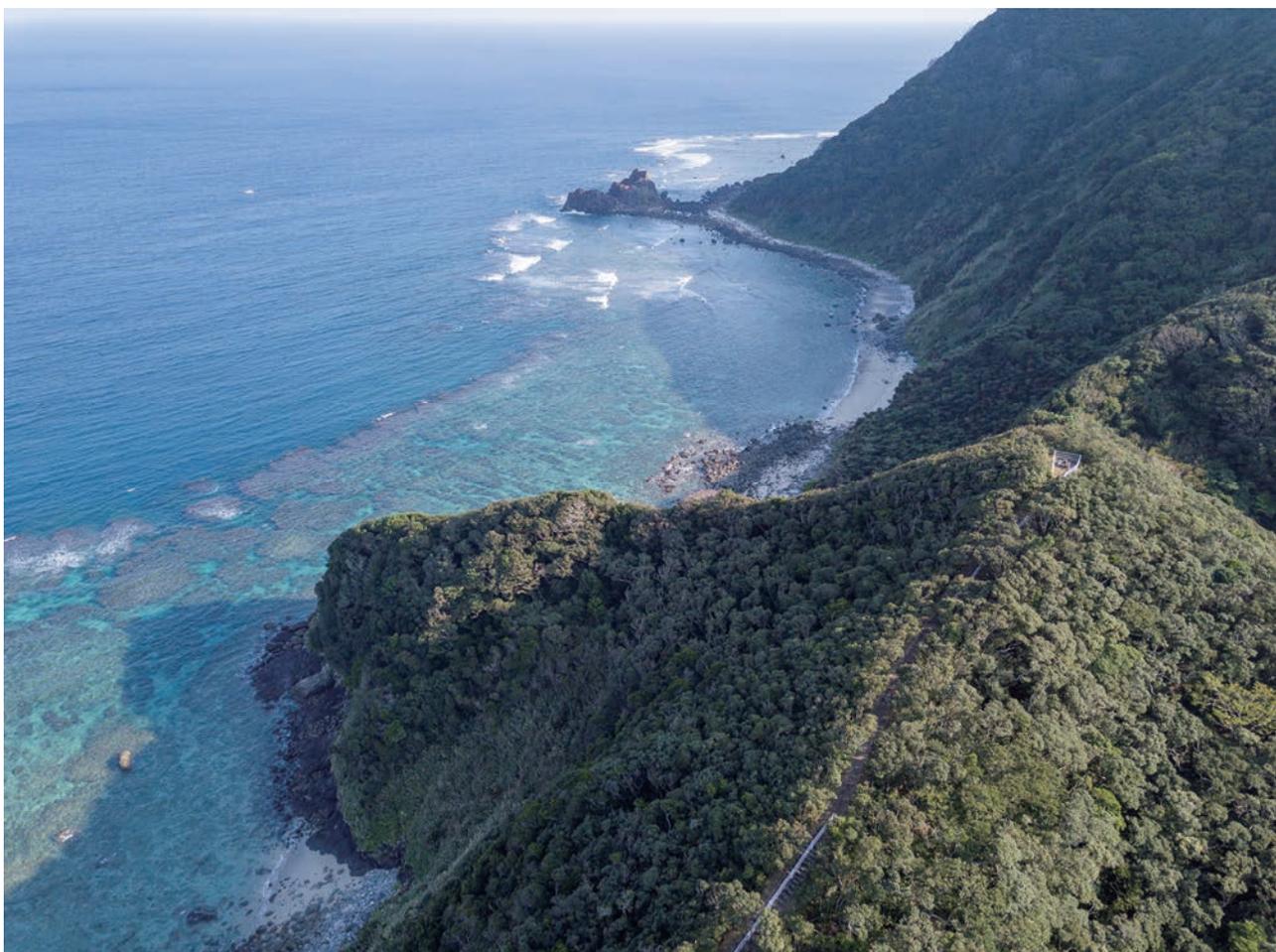


図 34 金子山青少年の森（城 康弘氏撮影）

注

- 注1 隣 重俊 1993『写真に見るふるさとの今昔 小湊むんがたり』（私家版）p93  
注2 隣 重俊 1993『写真に見るふるさとの今昔 小湊むんがたり』（私家版）p94  
注3 隣 重俊 1993『写真に見るふるさとの今昔 小湊むんがたり』（私家版）p96-p97  
注4 柳田国男 2009 酒井卯作編『南島旅行見聞記』 森話社 p172  
注5 隣 重俊 1993『写真に見るふるさとの今昔 小湊むんがたり』（私家版）



図 35 ホエールウォッチング（興 克樹氏撮影）



図 36 本場大島紬泥染公園  
（城 康弘氏撮影）



図 37 小湊港祭り（城 康弘氏撮影）